525-322
1200501494641
25
322

6. 5.4

新文學叢書

成澤玲川著

金星堂出版

525-322

はしがき

あはたゞしい新聞生活の間から生み落したその折々の隨筆をまとめて、こゝに「新聞戰線」一卷を世に送り出すことは私の大なる喜びである。

内容は東京朝日に發表したものを主とし、これに日刊アサヒグラフ、その他二三の雜誌に書いた舊稿を加へたもので、私としては耻さらしの記念塔のやうなものである。

たゞ下村海南博士が「新聞戰線」のうちへ、その名筆「有線・無線・人線」の轉載を快諾されたことによつて、吹けば飛ぶやうなこの書に、千鈞の重味を加へたことは疑ふの餘地はない。萬々一にもこの書が「飛ぶやう」に賣れることがあらば、それは一に博士のお蔭である。こゝに博士に對して深甚の感謝を捧げる。

昭和二年三月

東京朝日新聞社にて

著者

目次

新聞戰線……一
一　英女皇崩御の號外……四
二　米大統領永眠の瞬間……六
三　有線・無線・人線……一二
1　リンゲル液奉上……一三
2　大内山のリレー・レース……一五
3　扇御公表の刹那……一八
4　葉山の新聞軍……二〇
5　號外戰……二二
四　大震災の怪寫眞……二四

五 大當りの寫眞班の芝居……三四
六 ヒューズ立候補……三八
七 選擧運動費公表……四一
或日の夢……四九
一 秘密の島……五一
二 最後の日……五四
三 未知の世界……五七
四 海濱公園……六〇
五 羽織と袴……六三
六 胸の動悸……六七
七 かるゐざは……七〇
八 腹を抱えて……七三
九 聖代の奇蹟……七七

一〇 キモノ……七九
一一 最初の食事……八二
一二 米の藝術……八六
一三 倫敦へ……八九
一四 日本語新聞……九三
一五 凉風輸送……九五
一六 戀の夕暮……九八
一七 春子の寫眞……一〇一
一八 未來倶樂部……一〇四
一九 東京へ……一〇七
掃除哲學……一一一
サラ・ベルナールが取持つた緣……一二一
ねずみ……一二五

長靴と石油ストーヴ……一五二
雨戸と縁側……一六三
氷山の頂……一六九
棄て得ざる惱み……一七五
國旗調査……一八一
鼠の避寒……一八一
生活改善……一九七

新聞戰線

一　英女皇崩御の號外

ヴィクトリア女皇御不例の報が公表されたのは千九百一年一月の十八日であつた。八十年間の永い御治世に英國民から慈母の如くに敬愛され給うたお優しき女王は、ワイト島のオスボーン離宮で病の床に就かれたのであつた。英國有數の新聞社から御容體報道の爲に離宮に記者を特派したことは申すまでもない。

二十二日の朝である。式部官が離宮から出て來て記者團の前に立つた。

「紳士諸君……」

斯ういつた式部官の目には泪が溢れてゐた。

「……女皇陛下は只今お崩れになりました。私はこの事を諸君にお傳へする悲しい役目を持つて來ました」

式部官は悄然として離宮に戻つて行つた。

記者達は顏を見合せた。嚴肅な瞬間がそこにあつた。彼等は丁寧に右の手で帽子を取つて、それ

を左の胸に當て英國式の最敬禮をした。さうして一同靜かに離宮のお庭を歩いて、遙か彼方の道の方へ行くのであつた。

オスボーン離宮は女皇が千八百四十五年にお買上げになつたもので、苑內の廣さ二千英加であつたのを、女皇が更に擴張されて三千英加（約三百六十萬坪）にされたのであつた。（尤もこの離宮は先帝エドワード七世陛下戴冠式の日、その全部を國民に御下附になつた）。

それほど廣い御苑であるから、苑外までは三哩も歩かねばならなかつた。敬虔な英國記者達は、その永い〳〵間を、一人として歩調を速める者もなく、帽子を冠る者もなかつた。漸く苑外の道路に達した時も、彼等は尙且謹嚴と靜肅とを失はなかつた。そして近間の電信局に行つて、それ〴〵電報を本社に打つたのであつた。

ところがこの英國記者團のうちに、油の中の一滴の水のやうに、たつた一人の米國通信員がゐた。この男は紐育の某大通信社から派遣されて英國記者團と一緒に離宮に行つてゐた。式部官が出て崩御を傳へた。そして式部官が後姿を記者團に見せた時、米國記者の姿はもうそこに見えなかつた。

英國記者は悲哀と儀禮とに囚へられてゐたので、米國記者の行動に就いて深くも考へなかつた。若し彼の行動を注意する者があつたならば、少しも儀禮にならはぬ無作法の態度で三哩競走の世界

的レコードを破らうとして韋駄天走りに電信局に向つて走つて行くらしい男を見たであらう。

英國記者達が御苑內の道を靜かに歩いてゐる間に、米國通信員の詳細な電報は太西洋を越えて紐育に届いた。紐育からはそれを三分間に倫敦に打ち返し、二分間で太平洋岸に、更に數分後には太平洋を越えて極東にまで届いたのであつた。

こゝまで書いて私は念の爲に、東京朝日新聞の綴込を調べて見た。明治三十四年一月二十四日の第一面にロイテル電報（倫敦發上海經由）として二十二日の「御容體宜しき方」とあり同じ日附の後報には「御危篤」とある。その下段に昨日（廿三日）外務省公電として「二十二日午前六時四十五分崩御」の記事が出てゐる。當時外電は倫敦の路透のみで、紐育電報と特約のなかつた時代である。若し紐育電報であつたら二十三日の新聞に發表されたのであらうと考へられる。

それは兎も角、この電報を受取つて、事の意外に驚いたのは倫敦の新聞社であつた。

倫敦の新聞社では、各社とも選り拔きの記者を離宮へ派遣してあるので、紐育から逆輸入のこの電報を輕蔑と不信用の眼で見たが、事柄が重大なだけに、ともかく號外を發行し、同時に全歐洲へ轉電した。

英國の記者達が各社に戻つて記事を書かうといふ時分、倫敦の全市民は號外によつて、夙くに之

を知つてゐた。さうして多數の奉悼者が、町といふ町に群をなしてゐた。

いや、倫敦のみではない。全世界の文明諸國は、この時既に米國電報によつて大英國元首の崩御を知つてしまつた。若しこの「無作法な」一米記者がゐなかつたら全世界は一時間以上遲れてこのニュースを聞かせられるところであつた。ニュースの逆輸入は例のないことではないが、英國新聞が斯の如き大事件に、かくの如き不覺を取つたのは破天荒のことであらう。

二　米大統領永眠の瞬間

上

ヴイクトリア女皇崩御と絶好のコントラストをなすものは、マツキンレー大統領の死に際して米國記者が示した驚くべき活動である。

合衆國二十五代の大統領ウイリアム、マツキンレーはバツファロー市に開催されるパン、アメリカン博覽會の開會式に臨んだ。それは千九百一年の九月五日であつた。翌六日博覽會の一建築で大統領を主賓とするレセプションが開かれた。この席上、大統領は兇漢の爲に腹部に二彈を受けたのであつた。病人は同市のミルバーン氏の本邸に運ばれた。

恢復の見込があるといふ醫師の初めの見立を裏切つて、全國民が聊か愁眉を開いたも束の間、衰弱の爲に容態は急變して、死は時間の問題となつてしまつた。

「死の見張」の爲に全米國の隅々から、バツファローの市に集まつた新聞記者の數は實に三百人に達した。各社から選拔された腕ツこきの記者の各々が、大統領の死に關して「特種」を「眞先」に取らうといふ野心に燃えてゐるのであつた。

ミルバーン氏の本邸の建物は大通りから五十間ほど奥にあり、四ツ辻から七八十間も離れてゐた。しかし三百人の記者の訪問は非常な脅威であつた。萬一を慮つて儀仗兵が繰り出され、邸の周圍に哨兵線が張られた。

それにしても、斯く多數の記者の一人々々に、側近者が面會するといふことはより不可能のことであつた。

死期の近づいた時、三社の代表者――經育サン、聯合通信社、スクリップス・マクレー・リーグから一名宛――三名を限つて、ミルバーン氏邸へ自由に出入することを許された。いふまでもなくこの三社は當時の代表的なもので、全世界及全米國の主なる新聞と聯絡があつた。

三社の代表社は哨兵線を自由に通過して、大通りに臨時に設けられた彼等の電信局に往復するこ

とが出來たが、他の二百九十餘の記者は悉く哨兵に喰止められて建物にさへ近づくことが出來なかつた。三人の得意に引かへて殘る多數の不平が、如何なる形を以て現れるか、不安は大統領の容態の變化と共に刻々に加はるのであつた。

九月十三日、大統領永眠の前夜、哨兵の數は增された。警戒は極度に嚴重になつた。

軍隊と新聞記者團との夜の對陣は物凄い光景を現出した。筆と劍との重圍の中心ミルバーン邸の二階の一室には、燃え盡きんとする生命の火が「死」のやうな沈默に見守られてゐた。

その夜十一時、ジョージ、コーテリユー氏――後にルーズヴエルト內閣の大藏卿となつた――が三人の記者を呼んだ。

「大統領も今夜いよ〳〵絕望らしい」

斯ういつたコ氏の面上には悲痛の色が漂つてゐた。

「たゞ心配なのは、若し死去となつたら、數百人の記者團がどんな騷ぎを仕出來すか知れない。それに就いて君等に一つ相談がある」コ氏は斯ういつてその椅子を少し前にすゝめた。

コ氏は三人の記者に向つて語をついだ。

「私の考へでは、君等は今のうちから、この家と電信局の間を何度も往復して置く、斯うして君等に對する記者團の注意を鈍らして置く、いよ〳〵死去といふ時にも矢張同じやうにそろ〳〵と電信局に行つて、先づ君等の本社に電信を打たせて了ふ。さうして置いて初めて記者團に發表する。尙諸君の社では、もう此事を知つてゐる筈だと附け加へるのだ」

「なるほど」

「こんな風にしたら多分君等がニュースを速報する唯一の機會を得られようし、またその爲に君等の社の電信技手が電線輻輳に苦るしめられることもあるまいと思ふが……」

「素晴らしい名案です」

三人は喜んで贊成した。

別段用もないのに三人は、十五分か二十分置きに、哨兵線を越えて家と局との間を往復した。斯うして記者團に極度の疑ひを起させることなしに、計畫通りうまく行く筈であつたが、そこに一つの手違ひが起つた。といふのは三人の中の一人が大事な瀨戸際に本社から呼戻されて、代りの記者がミルバーン邸へ派遣されたのであつた。

呼び戻された記者は無口で頭腦のよささうな男であつたが、代理の記者は六尺豊かののつぽう
で、一見如何にもセッカチさうな顔つきであつた。
他の二人はこののつぽうが、家から局までの五十間の間を、秘密を洩らさずに通過し得ようとは
信じなかつた。二人はのつぽうを呼んで、事情を打明け、若しさあといふ場合には、何事も起らな
かつたやうな顔をして靜かに局まで歩るくやうに、吳々も興奮したり驅け出したりして、記者團に
さとられてはならぬと注意した。
しかしスクリップス、マクレーの記者は、こののつぽうをたよりなく思つて、別に計略をめぐら
した。彼は社の電信技師に言つた。
「君は今晩中、外に立つて邸の玄關の戸を見つめてゐて吳れ」
技師はうなづいた。
「僕が玄關から出て帽子を脱ぎ帽子の滑り革をハンケチで拭いたら、すぐ局に戻つて全速力で通信
を送つて吳給へ」
記者は斯ういつて一枚の紙片を技手に渡した、それには、
大統領　時　分逝く

と書いて、その時間は記者が玄關に現れた二分前にして、技手が記入するやうにあけて置いた。
十四日の午前二時五十分、コ氏が二階から降りて來て、大統領の死を傳へた。三人は急ぐ心を沈
着な態度に包んで玄關を出ようとした。
のつぽうは、もうその時既に大分興奮してゐた。
三人は戸を開けて玄關に出た。
スクリップス、マクレーの記者は、電燈の下でその帽子を取つて、ハンケチで滑り革を拭いた。
この瞬間、彼は五十間の彼方に技手が走り去る影を認めて、うまく行つたなと思つた。三人は靜か
に歩き出した。
のつぽうは神經的な急ぎ足で道の半を歩いた時、一寸躊躇てゐたが、急に韋駄天走りに走り出し
た。彼が哨兵線を越えて新聞記者線に達した時には、その理由を訊く必要はなかつた。總てが彼の
間の拔けて興奮し切つた顔に、あり〳〵と書いてあつた。
この瞬間、附近は記者團の狂瀾怒濤の巷となつた。彼等はミルバーン邸に殺倒すべく哨兵線に突
貫した。再三の擊退にも拘らず、哨兵は肉迫する記者團と揉み合つた。三人は命からぐ〳〵逃げてし
まつた。電信技手までが記者團のモッブの爲に機械から追拂はれた。

たゞ一人、このうちに冷靜な寫眞班員がゐた。彼はこの光景をマグネシユウムで撮影した。凡ての記者の「特種」よりも、この一枚の寫眞はこの場合に於ける唯一の傑作であり、前代未聞の光景の描寫であつた。

かゝる騷擾のうちに、悲しくも嚴肅なバツフアローの夜は徐ろに明けて行くのであつた。

三　有線・無線・人線

法學博士　下村海南

一國の元首の生命に關する報道は新聞が最も重大視する所のものである。私はその例を英國のヴイクトリア女皇、米國のクリーヴランド大統領に求めて新聞戰の如何に激烈であるかを示した。これに我が明治天皇崩御當時の資料を加へたく思つたのであつたが、當時自分は海外にあつたので、その間の事情を詳にすることを得なかつた。然るに昨年末大正天皇の御不例より崩御の御事あり、自らもこの新聞戰線の後方勤務にあつたが、時勢の進歩といはうか、この報道戰は實に白熱化したものであつた。然るに社の下村海南博士が「有線・無線・人線」と題してこの間の苦心と競爭の實況を東京朝日新聞紙上に發表されたので、請うて玆に轉載のお許を願ひ、その快諾を得た。

斯くて私の不完全な英米兩元首に關する新聞戰記と相待つて日本に於ける最新の貴重な資料を得ることが

出來た。三者を併讀していたゞけば、日英米三國の新聞記者の活躍振りと併せてその國民性や社會狀態をも比較さるゝことを得るであらう。（著者謹記）

1　リンゲル液奉上

この度の聖上御不例に際し、ある日の事、地方へ崩御と誤り傳へられて、至るところ飛んだ失態を演じ、悲喜劇を生んだ。ここにその誤り傳へらるゝに至りし、涙ぐましい生々しい哀話の一節を紹介して見よう。

◇……◇

十六日の午後一時から聖上の御脈御熱の上下極めて御不調と成らせられ、食鹽水御注腸を初め、數回にわたり强心劑の注射を奉上し、極めて憂慮すべき御容體となられた。翌十七日は引つゞき御病勢御減退の兆を拜せず、午後十時四十分の宮內省公表にも

今夜リンゲル氏液の皮下注入を奉上せるもその効果著しからず

とあり、新聞の中ではもはや御崩御とも推察せらるゝやうの記事がのつて、發賣禁止となり差押

へられたものもある。この時分の事である、寸時といひたいが一分一秒、否一秒の何分の一をも爭ふ新聞社や通信社の連中は、非常な緊張をもつてそれぞれ宮内省から本社へのニュースの報道に血眼になつてゐた。

宮内省の數多いここかしこの部屋毎に、各社の社員がそれ〴〵電話にかぢりついてゐる。甲社の社員が電話口でさゝやいて居た奉上奉上といふ詞が、乙社の社員に正しく崩御と聞こえた、時も時、聖上の御容體が次第に險惡に赴かせられてゐる、昂奮し切つた乙社員は一圖に崩御とのみ信じ切つて、突差に自分のかぢりついてる電話からその本社に聖上崩御と通話して仕舞つた。丁度その時本社から豫約通話の通じてゐた十有餘の地方新聞社へはソレッと許りに崩御の通知が移されたさうだ。

すぐに誤報と分つた時はもうあやにくと通話時刻は切れて仕舞つてある。改めて至急通話をそれぞれ申込んだが中々かゝらない。地方でも氣の早い手回しのよいところは、その間にもう號外もだしたはりだしもした、それ弔電、それ弔辭、中には生徒をあつめた先生達の崩御についての謹話とそれからそれへくさ〴〵の悲喜劇が生れたのであつた。

話が戻つて今のは崩御ではない、奉上の誤りだと分つた時のその乙社員はどうであつたらう。人一培勤勉な眞面目な正直者で通つてゐた乙社員は、ウンと悲鳴をあげたまゝ失神して仕舞うた。

一同は混雜の中からかつぎ出して、病院に運ぶべく自動車にかつぎ入れたが、失神した男は車中でも、

「公表！　公表！　公表！」

とうはごとをつづけてゐたといふ。ただこれだけでは、まだあまねく世間の同情理解を得にくいかも知れぬ、こゝに今少し大正から昭和にわたる新聞の樂屋につき話して見たい。

2　大内山のリレー・レース

二十四日午後十二時の御容體書は

御體溫四〇・八　御脈算し難し　御呼吸八四

御氣管喘鳴を伺ひ奉る

といふ二行であつて、二十五日午前零時二十五分、宮内省の階上内藏頭の室の隣室高等官食堂の大廣間で、渡部三浦の各式部官により口づから公表される。もとより人員の都合や電話室までの距離や、いろ〳〵の關係で各社部署の編成にそれ〴〵相違があつたが、朝日社では少くとも四名

これに一二名位の豫備員がこの公表室に詰めかける事になつてる。公表の豫告をうけると、電話機を備へてある階上階下各室のたまりの數百の社員イスにある者も板敷の上の毛布の上に横臥せる者も、皆バネ仕かけのやうになつて起ち上る。朝日社員の根據地は階下調度課の一室で、この部屋には國民、やまと、日本の三社と報知、中外、朝日の三社と二ながれにそれ〴〵に唯一個の電話機を唯一の力綱にして陣取つてる。

公表のベルの音と共に起ち上つた勇士の面々は、ドアをあけてドヤ〳〵と階上に登つてゆく。上着もない、チョッキもないのが多い。多くはスウエーターでズボンもキリリと巻きあげてある。さうでなければ多くは半ズボンで、いづれもリノリユームを布きつめた廊下を輕快に走るために皆たびはだしになつてる。目じるしをかねてそれぞれに向ふ鉢巻をしてゐるのが多い、一寸西南戰爭か、加波山事件といふ光景である。

階段、これが三段になつてる。上段が十五階、中段は五階下段は二十階を越えてゐる。この階段を曲がり曲がり登りつめると一寸した廣場があり、これから折りかへして約六十メートル、更に又四十メートルにして公表室に達する。四人の後詰はこの階段の上のところに手ぐすね引いて待ち構へ、先陣の四人は公表室にゐる。

日時、御體溫、御脈、御呼吸と印刷になつた洋紙を前に鉛筆を手にした記者連は、後へスタートを切るべく腰を浮かし、足拍子をとりながら四人組の第一記者は御體溫のところへ 40.8 と書くが早いか、ちうを飛んで廊下へ飛びだす第二の記者は、先順の記者と記事との照校に便にするため第一記者の如く、御體溫のところへ同じく 40.8 と記す。次に御脈の所へ「算し難し」と書くが早いか飛んでゆく。第三の記者は、前二者の如くそれ〴〵記入し、更に御呼吸の所へ 84 と記して飛びだす。第四の記者は前三者のやうに記入した上、最後に「御氣管に喘鳴を伺ひ奉る」と記して驅けいだす。それが順々に、階上の所で後詰の勇士にそれ〴〵紙片を引きつぐ。後詰の勇士は白紙を受取るが早いか、三曲りの階段を宙を飛ぶ。本當に宙を飛ぶ。中段の五階などは、一足に飛びおりる。かうなると階上階下の別はもとより、公表室内の机とドアの位置でも、電話を備へつける各室内の位置でも、分秒を爭ふ上には重大なる關係を持つてゐる。

そこでこの走者だけで先陣四人と後詰が四人これに本社へ電話をかけるもの豫備やら補助と十一人、甲乙二班制となり隔日とか晝夜交代にしてゐたが、二十四日の午後から御容體益々御險惡となる、二班總動員で一時間毎に毎回交代となり、わづかに二行の記事を、二百メートルとない間に送受するため、こゝに二十二人が緊張して詰めてゐるといふ事になる。

3　崩御公表の刹那

運動狂の筆者はたび〳〵陸上競技でリレイ・レースを見たが、こんな眞劍な物すごいレースは始めてである。

命がけである、一生懸命である、暗からうがすべらうが曲つてゐようが、柱があらうが、階段があらうが、そんな事に頓着はない。スタートのやり直しもない、インターフエヤーはノベツにある衝突どころではない、轉ぶ引つくりかへる、しかし中止もせねば仕直しもない、どこまでも握つた一片の紙片を、電話機の前に立てる僚友の手に渡すべく決勝點まで驅けつけねばならぬ。

人手の少いところはさう眼まぐるしいレースをやるまでもないが、さりとて人のやりくりがつきにくいため、中にはビール瓶携帶とある、どうしたのだとたづねると大きい聲でいへないが小便用でネとある。人手の多いところは多いところで、第一位の新聞としてののれんを汚したくない、寸刻でも眞先にとあせるだけに、各社間の競爭はます〳〵白熱になる。

東京朝日の二十四日夜の宮內省詰二十二名は社會、通信、運動、政治、調査、外報、學藝、航空各部からすぐつた混成軍で、中にも運動部の勇士などはお手のものだとばかりに活躍してる。

「どうだい神宮トラックのリレイと？」

たづねたら、

「どうして〳〵一時間毎ですが眞劍です、段々馬力がかゝつてくるといふのですから全く物すごいですよ」

實際物すごい！

二十四日の午後二時からは一時間毎に公表さるゝ御容體が益々險惡となる、それが午前一時四十五分の公表には、

大正十五年十二月二十五日午前一時十五分

御病勢益々御增進遊され御危險に迫らるゝの御症狀を拜し奉る

とあり、恐れ多い事ながら御回春は御困難と拜された、間もなく引つゞき公表とある、さすがの若武者達も胸とゞろかして公表室にいれば、いつになく杉內藏頭はじめ高官が出座してゐる、も早これまでといふ豫感に胸を打たれたが、さていよ〳〵午前一時二十五分に御崩御あらせらるゝと聞いたときは、滿堂思はず電氣にでも打たれたやうな衝動を感じ、ハラ〳〵と涙がにじんでくる。ふる

へる手先でやう〳〵崩御としるした運動部の岡本選手は、書く筆先もしどろに紙片を手にして、走りは走つた、いや走つてるつもりだつたが、上づつた聲でたゞ崩御崩御と口走つてるだけで、どうしてもいつものやうに足が進まなかつたといふ。

筆者も隨分數しけく宮内省に足踏をした事があるが、あの廊下でリレイ・レースを見ようとは思はなかつた。しかもそれが大正から昭和にうつる思ひ出深い二十五日の眞夜中であつた、あの階段の上り口で小暗い中を極度の緊張で猪突してくる勇士の群、この印象は恐らくいつ〳〵までも深く刻まれて殘る事であらう。

が？　一體どうしてかうまで競爭が猛烈となるのであらう？

4　葉山の新聞軍

宮内省の御容體の公表だけにこれだけの活動振りであるから、そのニュースの源である葉山に至りては、常例ものゝ宮内省の公表が、場所柄とて群衆も多く、メガホンによつたのでも混雜さ加減が想像される、況や公表もの以外となりては總てが各自の自由行動とあり、神出鬼沒しのぎを削り

て互に祕術を盡すといふ亂軍狀態であつて、朝日社だけでも社員から運轉手給仕に至るまで出動せるもの實に五十人を越えた。

何でそんなに多勢いるのかといへば、新舊御用邸の正門通用門四個所には、晝夜の別なくぶつとほして雨の夜も雪の朝も立ち番がいる、內閣員は警察署の二階を詰所とし養神亭に宿泊する、宮內の大官は長者園に、樞府の連中は日蔭の茶屋に、侍醫侍從は波多野別邸に、いはく某元帥某局長某書記官と、それ〴〵要視察の人々が散在してる。御容體が御險惡だといふ、それとばかりにこれ等の人々をはじめ鎌倉西園寺公の假住宅と、各方面を警戒せねばならぬ。今何の某が御用邸を出たといふ、宿屋へか？　いや東京へといふ、逗子の停車場付の詰所からは、箱乘りといふてもお客の懷中物をスルのではない、心のひもを解いて話を聞き出すべく、箱乘り記者が何名となく行動する、鎌倉にも大船にも横濱にも到るところ通信網を利用して、往きもかへりも活動をつづける。

寫眞隊も一二個所では足らない、自動車は土地のは徵發されるから東京より十餘臺さしむけられる。これが緊急なときは金澤杉田横濱經由で、早いのは一時間二十分位で葉山東京間をはしる。まだこれに輪をかけて東京葉山間を連日何回となく活動したのは傳書鳩で、早いのは二十分で飛んだといふ、鳩だからおとなしく默つてるやうなものの、まあせめてこんな時にでも表彰してやらねば

なるまい。

ある記者は御容體急變とあると、すぐ某大官の別莊に電話をかける、大官がオオさうかと許りに出仕の仕たくをした時分には、自動車でもうその別莊へお迎へに出かけてる、ある記者は漸くの事で昭和といふ年號を聞き取つたが、息せき驅けたため、本部の庭まできてぶつ倒れる、セウワ……セウワと口走つてるつもりだが、實は聲がかすれてさつぱり聞えなかつたといふ、ある記者は宮內省の自動車の行列がすぎて漸くの思ひで往來を驅けぬけると、巡査からなぜ疾走するかと引つつかまへられ、平くものやうになつてあやまるが放してくれなかつたといふ。ある社では運動の選手が紙片をもつて奔ると後からオート・バイで追つかけて受取るといふ、新案徒步オート・バイのリレイ・レースもやる。何分にも東京橫濱各地から自動車オート・バイが殺到して、自動車一臺の借料一日百五十圓に上つたといふから、葉山逗子一帶の混雜狀態が想像される。ある社員がオート・バイに引き倒される、衝突の怪我や風邪引などはザラで、腦貧血患者まで續發する、かうなるともう人道問題である。まあこの邊までは公表しても差支ない方で、中には嚴祕の殿中ものもあれば、隨分藥が利きすぎて、しんらつなあくどい種もないではない、それならなんでさうまで氣狂ひ染みて騷ぎ立てるのか？　少々わけを話して見たい。

5　號外戰

かうまで猛烈に活動するのは、もと〳〵聖上の御不例とあり、民衆をあげて寸刻も早く知らんとするニュースである事はもちろんだが、その寸秒を爭ふといふのはたれと爭ふのかといへばそれは同業者間の競爭といふ事になる。

宮內省の一室から本社の社會部卓上の電話に公表といふ豫告が傳へられると、忽ち百名近き社員が十重二十重に群がつてくる、公表の際は無用の人立よるべからずとはりだしてあるが、どうして中々理くつ通りには參らない。テーブルを圍んだ群衆はかたづをのんで公表をまつてる、それは今丁度宮內省では加波山の暴徒のやうな連中が、公表室へむけてくりだしてる時だ。山雨來らんと欲して風樓に滿つとでもいはうか、むらがれる群衆は紙片と鉛筆を手に〳〵公表の電話を今やおそしと極度に緊張してまちかまへてる。この群衆は唯公表のニュースを聞かうといふ連中ばかりではない、何よりもすぐ號外にとりかかるといふので文字場の方へ、又大阪の本社へ通ずべく東京大阪兩社間の專用電話へ、更に靜岡長野新潟以東、東京朝日のなは張り內の重立ちし通信部へそれ〴〵通

報すべく宮内省でたつた二行の記事が四人の手によりて順送せらるるが如く、社内でも各方面へも順次に書きとり書きとりそれ〴〵電話で傳送されてゆく。つまり公表される文句はほとんど同時といふてもよい、重立ちし各地方でも號外になる、大阪の本社では又本社の號外ばかりでない東京朝日のやうに大阪朝日のなは張り内は、遠く臺灣滿鮮に至るまで又それ〴〵傳送されてゆく。

この號外を市内要所々々にはりつけたり購讀者に配達する方はまだよいとしても、東京のやうに呼賣りするところでは、各新聞社に定雇ひの號外賣を抱へてるわけでなし、寸時でも號外を早く刷りださぬと、手遲れになつてはさばき手がなくなり折角の號外も山のやうに積んだまゝ腐つて仕舞ふ。それだけにこの號外戰は互に近い新聞社間ほど勢ひ競爭が激烈になる。これは唯號外に付てだけの話である、まだ夕刊から本紙の第一版より最後の市内版に至るまで、各版の締切にそれ〴〵間に合さねばならぬ、ところがこの競爭が熱してくると次第に度を過して脫線となり、記事が先き廻りしすぎて飛んだ失態も演じられる、惡意でもなんでもない、鹿を逐ふ獵夫山を見ずで、熱心の極が一歩一歩と踏みあやまる、今こゝにそんな事まで一一スツパヌキでもあるまいから唯新聞といふものも樂でない、たつた一行二行の文字にも、何百人といふ社員の精根がつくされてるといふ事を說くに止める。

終りに一言する、大内山のリレーレースなどはこれが最初で最後であらう、又さうありたい。これが特種といふでなし、豫期し得べき時刻に公表ものとして披露さるゝステートメントである均一ものゝ公表にまでかうした競爭をするといふ事は好ましい事でない。これは同時通話又はテレライター等の機械の設備で、官署の公表が直に各社へ同時に通じるやうにならねばならぬ。ことに無線放送の發達は號外ものに代りて、益機能を發揮する事は無論である。電送寫眞であるとか、いろいろの科學發明も益進歩發展するであらう、同じ無線でも航空輸送は益發達するであらう、現に今回の葉山から東京への還御の御寫眞は河内飛行士により、大阪の本社へむけ我國では始めての長距離夜間飛行に成功して、東京と同じく大阪の朝刊に掲載せらるゝことになつた。

まだ今回のニュースの海外通信につき新聞聯合社及在日海外特派員の活動についても話したい事があり、猶忙中の混線で某社の奉上と崩御の誤傳といふ事につき、さしたる失態を演じなかつたといふ眞相を耳にした。精しくその實狀を說明したいが餘白もない、こゝに筆をおくことゝする。

（昭和元年十二月廿八日――廿一日）

四　大震災の怪寫眞

上

大地震に續いて大火が起つた。近代都市の誇りであつたサンフランシスコは忽ちにして、この世からなる地獄と化してしまつた。それは千九百六年四月の出來事であつた。この前代未聞のニュースが、當時の全米國に如何に大きなショックを與へたかは事新しく説明するまでもあるまい。

桑港から紐育までは急行列車でも六晝夜かゝる。その紐育と並ぶ大西洋沿岸の或る都會にA新聞といふ沿岸有數の新聞社がある。

大地震の日から五日目の午後のことである。A新聞社の繪畫記者室に整理部長と二三の繪畫記者とが三日月形に椅子を向ひ合せて、四方山の雜談にふけつてゐたが、話題は自然と桑港大火のことに落て來るのであつた。

「もう二三時間したら……」

整理部長は斯ういひながらシガーの先を前齒で嚙み切つて、マッチを擦つた。

「……桑港から寫眞が着くだらう。誰か機敏な奴が、素敵な光景を澤山に撮つて、大急ぎでこの市へも持ち込むだらう」

「無論紐育では第一にそれを手に入れるでせうね」

若い繪畫記者が嘴を入れた。

「無論さうだ。僕の方も桑港特派員に電報を打つて置いたが、しかし誰でもその寫眞をこの市へ持つて來たら、どんなことをしても社で買つてしまはなけりやならん。値段なんかこの際問題ではないからね」

「それに就いてどうすね」

やゝ年取つた繪畫記者が何か言はうとした時、階段を昇る足音がコツ〳〵と響いて、開け放されたドアのところへ見知らぬ男の姿が現れた。

「編輯の方にお目にかゝりたいのですが……」

男は斯ういつて手に提げたスーツ・ケースを下に置いて、心持ち汗ばんだ額をハンケチで拭ふのであつた。

「私が整理部長の××です、お入りなさい」

男は入つて來た。

「私はたつた今、桑港から着きましたものです、實は地震の種板があるのですが」
部長の頭には或る希望がピカリと閃いた。まち設けた「機會」がお膳立をしてやつて來たのだ。
「現像してありますか」
「えゝ五枚とも」
「みんなで、いかほどです」
途方もない値段が僅か五枚の硝子板に要求された。しかし整理部長にはそれは當然の値段であつた。たとへ、それを十倍百倍したものでも買はなければならぬ場合である。資本の豊富を强味とするA新聞社が斯んな値段に驚くのではなかつた。
「兎に角編輯局長に會つて下さい」
斯ういつたと思ふと整理部長の身體は、もう階段を飛ぶやうに降りてゐた。男も後について行つた。
編輯局長は冷靜と沈着と鋭敏そのものゝ權化ともいふべき面構への紳士であつた。整理部長の話を聽くと極めて無愛想に
「種板を見せて下さい」

といつた。その態度は檢事が被告を訊問する時のやうであつた。
種板は机の上に置かれた。
局長は種板の一枚を透して見たが、何んと思つたか、机の上の時計をチラと眺めた。さうして何氣なく殘りの種板を見てゐたが、急に、
「これはよしませう」
翌日の社説の校正刷を摘み上げながら、編輯局長は冷淡な態度で斯う答へた。

中

整理部長は折角網にかゝつた魚をとり逃がした樣な失望を感じた、その失望と同時に局長に對する不平がムラ〳〵と頭をもたげて來た。頭腦のすぐれていゝ局長ではあるが、持前の頑固の爲に時々失策をする。この場合あの種板を買はぬといふことがあらうか。斷られた男が平氣で出て行つた時の顏は、
「今に見ろ、こゝばかりが新聞社ではないぞ」といつてゐるやうに見えた。無論その種板は商賣敵として火の出るやうな競爭をしてゐるB新聞社へ持ち込まれるにきまつてゐる。信用と勢力に於て

はB新聞を凌駕してゐるA新聞ではあるが、黄色紙のBの爲めには、時々、イヤ最近にも「拔かれ」てゐる。今又この大事件の寫眞でBに拔かれることを思ふと、整理部長の不平はいよ〳〵高まらざるを得なかつた。彼は局長に拒絶の理由を質問した。

「理由？　何でもないさ、ありや君、僞物の種板だよ。僕はその時、時計を見たのさ。桑港からこゝまで、どんなに旨く汽車を乘り廻して來ても、あの時間には寫眞が來る筈がないんだ。だから僕は僞物と睨んだのだ。」

整理部長は一言もなかつた。黄色を帶びないA新聞が、見す〳〵僞物の寫眞を紙上に載せて、他社を「拔いた」といつて誇る譯にも行かないのであつた。

僞物の寫眞がB新聞社に買收されたといふ確報を整理部長が受取つたのは、それから可なり時が經つてからであつた。局長はもう歸つてしまつた。明日の新聞の寫眞繪畫を按排する權能は、いま整理部長の手にある。

彼の心のうちには、新聞記者のジョーナリステイツク・ノーションが偉大な煽風器のやうに、中心に熱をもつて動いてゐた。自分の社ではあの寫眞を出さないとしても、一見本物らしいあの寫眞を引伸ばして、第一頁の全面に掲載し「我社が最初に入手した桑港大震災の寫眞」といふ大活字の

下に、明朝のB新聞に發表されることは、如何にも堪え難いことである。その僞物であることは後に至つて判るにきまつてゐる。それにしても、たとひ二三時間でもB新聞がそれを「拔いた」といふことになるのは、忍ぶべからざる屈辱としか考へられなかつた。

「よーし！」

遂に或る決心が整理部長をとらえた。

「こッちも一ッ僞物で行つてやれ」

ジョーナリズムの弊害が、斯うした競爭心から起ることは、彼も常々承知してゐたが、この場合さういふことを考へる餘裕もなかつた。彼はそれほど熱して居た。

もう夜中であつた。寫眞班員はみんな歸つて幾つかの暗室の戸には悉く錠前が下ろされてゐた。が、のみと鉞が持ち出されて暗室といふ暗室の戸は全部叩き破られた。

そこにはあらゆる種類の種板が棚の上に山と積まれてゐた。災害に關係のある種板、地震、火事暴風といつたやうな――の中から倒潰した建物や破壞した光景の凡ゆる種板を引出して、それを悉く燒付けさせた。書庫からは桑港の名勝寫眞帖を出して、電報の記事と對照して未だ損害のない大建築を切拔かせた。

これ等の材料は一纏めにして繪畫記者の手に委ねられた、繪畫記者は鋏と糊とを以て、それを厚紙に貼り付け始めた。

下

紙の上に震災の桑港を「創造」することは可なり骨の折れる仕事であつたが、流石に手慣れた繪畫記者は手際よく仕事を運んで行つた。出來上つたものを見ると、燒け倒れて骨ばかりになつた建物の殘骸、くづれた煉瓦の柱、飴のやうに曲つた鐵骨や、燒殘つて尙烟を立てゝゐる木材などを雜然と配したのを前景に、火災にかゝつて盛に燃えてる建物を中景にあしらひ、損害をうけない主なる建物が淋しさうに聳立する光景を遠景にして、公報によつて被害の區域を定め、更にモルグから引張り出した桑港鳥瞰圖に基いて、各々の建物が正しい位置に配置されたのである。寫眞の繼目をごまかす爲に煙を配して濛々たる雰圍氣を作り、その間から半ば廢墟のやうになつた桑港の市街が眞に迫つて見られるのであつた。

寫眞製版の出來上つたのは組版が將に印刷部に廻されやうといふ間際であつた。組込みの第一面は取除けられて、そこに一頁大の大寫眞が入れ替へられた。

斯うしてB新聞に「抜かれる」ことを防禦する一方、更に本物の寫眞を一刻も早く手に入れる必要があつた。整理部長は寫眞製版部の主任を呼んで、一本の電報を手渡した。それは紐育にゐるA社の通信員に宛たもので、

桑港からの寫眞を買ひ夜行列車で本社に持參せよ、號外ものなり。

といふ文面であつた。

「寫眞が着いたら、すぐ號外を出すのだから、手配を頼むよ」

部長は斯う命令した。

翌朝のA新聞には昨夜造つた僞物の大寫眞が第一頁全面に印刷してあつた。それには全頁を横に貫いた大見出しが、さも誠しやかに附けられてあつた。(尤も之は後に僞物であるといふ事を社から公表した)

紐育の通信員は寫眞を手に入れて早朝社に着いた。まちかまへて居た繪畫記者は、直ちにこの寫眞を修整して寫眞製版部へ廻した。寫眞到着から約三十分にしてカットは仕上げられ、必要な說明も組付けて印刷部に廻されたのである。

斯うして間もなく「桑港震災の寫眞號外」、「ゲツト、ザ、ピクチユアース」の叫びは町から町へ

響いたのである。

斯ういふ古い話は、日本今日の新聞寫眞の進歩に比すれば別に珍らしいものではない。私はたゞ新聞が寫眞報道に力を注ぐやうになつた十五年前の競爭の一端を紹介すれば足りる。僞物を以て讀者をだまし得た時代は既に過ぎ去つてゐる。

五　大當りの寫眞班の芝居

内に於ける新聞編輯者の苦心もだが、外に出て活動する寫眞班の骨折りもまた並大抵なものではない。これもアメリカの或る町に起つた話しである。

數百萬弗に纏はる民事訴訟が或る法廷に持ち出された。訴訟の内容は複雜してゐるが、原被双方に尤もらしい申分があるので、誰もが判斷に苦んだ。それだけこの判決は一般の興味を唆つたのである。殊に原告が當年二十三歳の若後家で、評判の美人だといふことが一層噂の種となつた。新聞も初めからこの事件に多くの紙面を割いてゐたので、いよ〳〵判決の當日になると、裁判所の周圍は物見高い群集によつて十重二十重に取圍まれてしまつた。

各新聞社は寫眞班を派遣して原告が裁判所の玄關を出る所を寫させようと試みた。それは判決がどうあらうと、新聞寫眞として撮るだけの價値があらうといふので。

裁判所の建物は、塀もなく、柵もなく、電柱もない廣場の眞中にあつた。建物を乘せた絨氈のやうな芝生にはセメントの歩道が細長く通じてゐるのみであつた。さうしてその周圍は既に幾萬の群衆で身動きも出來なかつた。

裁判所正面の向側にたつた一つの家があつた、その家の二階にはたつた一つの窓しかなかつた。新聞社の寫眞班が、裁判所から出て來る原告を寫し得る場所は、この窓が唯一のものであつた。――無論それは原告が表玄關から出るものと假定して――。

早起きのO社の寫眞班員二人が一番先きにやつて來た。彼等は何よりも先に足場を探した。さうして裁判所前の唯一の家の唯一の窓に眼をつけた。彼等は家に入るや否や逸早くこの窓を占領してしまつた。

少し遲れて、U社の寫眞班二人が來た。彼等は直に窓に氣が付いた。

「しまつた」

と二人がつぶやいた。その窓には割込む餘地はなかつた。たとひ餘地があるとしても、同じ場所

から同じ向の寫眞を撮ることは彼等の最も嫌ふことであつた。遂に下の二人は裁判所の玄關のドアを押して中へ入つて行つた。

窓を占領した二人に取つては、今朝の早起は金に換へ難い得であつた。彼等は玄關を入つた二人の同業者を冷かに見下しながら、窓ぶちに腰をかけて、煙草をふかしてゐた。無論その間にも四つの眼は一刻も裁判所の玄關を見遁さなかつた。グラフレックスのカメラを膝の上に、フオーカスは既に定まつてゐる。スライドも引いてある。ソレッと云へば、ボタン一つ押してガサリとやつてしまふばかりになつてゐた。

急に、裁判所の玄關の大戸が動くよと見る間に、U社の寫眞班員がカメラを兩手にかゝへたまゝ飛び出した。彼等は建物の角を曲つて裏口に向つて走つて行つた。群衆がソレッとばかりに我れ勝ちにその後を追つて殺倒する光景は、たゞ事ならざる樣子である。

「何か裏門の方に起つたんだよ」

窓ぶちに待かまへてゐたO社の二人は斯う云ひながら大急ぎで家を飛び出して群衆の後を追つた。

そこには驚くべき群衆の集團がどよめいてゐたが、お互に「何があつたのでせう」、「どうしたんだらう」といつた調子で、誰もが何事が起つたかを知る者はなかつた。たゞカメラを持つた二人の男が忙てゝ裏口に向つて走り出して、群衆がその後をつけたといふ事實の外には、實際何事も起つてはゐなかつたのであつた。

U社の寫眞班は、斯うして群衆を驚かして置いて、大急ぎに、しかし今度は目立たぬやうに裁判所の正面に出た。O社によつて占領された前の家の窓はガラ空きになつてゐる。彼等は家の中へ突入した。

階段を上りながら、

「どうだい、旨く行つたらう」

と一人がいつた。

「成功々々」

と他の一人が微笑んだ。

それは云ふまでもなくO新聞の寫眞班を此窓から追つ拂ふ爲に、最初から仕組まれた芝居であつたのだ。斯うして後の烏はまんまと先の烏を拔いてしまつたのである。（一一・九・二）

六　ヒューズ立候補

今の米國國務卿ヒューズが保險法研究家としてメキ〳〵賣出した時分の話である。

紐育州の共和黨員がサラトガに集合して、知事候補者の指名を行つた。當事の知事は今は亡きフランク、ヒツギンスであつたが、ヒツギンスの起否が不明であつたゝめ、時の大統領ルーズヴエルトも胸中候補者はありながら、言明を避けてゐた。ルーズヴエルトの腹の中では、ヒツギンスが再び出馬するならそれも善からうし、若し引込むのなら、ヒューズを指名したかつたのであらう。

紐育州の知事から大統領になつたものにクリーヴランドがありルーズヴエルトがある。一州の知事ではあるが、大統領級の人物でなければならぬ。さういふ意味からこの指名は非常に政界の注目を惹いたのであつた。

ところが肝腎のヒツギンス自身の腹が未だきまつてゐないのだから、端からの揣摩憶測の當りつこはない。いくら敏腕な新聞記者でもヒツギンス自身の意志を確かめるより外に途がなかつた。

大會が近づくにつれて、ヒツギンスは態度を明かにする必要にせまられた。午後一時、サラトガに集まつた新聞、通信記者の連中は知事ヒツギンスが間もなくその進退に關する一書を公にすると

聽いて、ソラツとばかり、知事のゐるオルバニー市に押しかけて行つた。

ところが、合同通信記者がたゞ一人、取り殘されたやうに、サラトガに踏止まつてゐた。彼の考へでは知事が態度を決する前に、きつとサラトガにゐる共和黨の幹部と相談するにちがひない。さうして相談すべき相手は誰であらうと考へて見た結果、彼は上院議員のツリーに白羽の矢を立てた。

彼は他社の記者團がオルバニーに行つたのを見濟まして、すぐにツリーをホテルに訪ねた。「まもなく、知事からあなたに重要な御相談があると思ひますが、是非私にもそのお福分けを願ひたいのです。兎も角、今日はあなたの跡をつけて歩きますから……」

ツリーは案外碎けた調子で、

「フーム、私も多分知事から何とかいつて來るだらうと思つてゐる。跡をつけたければ勝手につけ給へ」

彼は腹の中でしめたッ！　と思つた。さうして影の形に從ふよりも確かに、彼はツリーの跡をくつついてあるいた。

遂にツリーは電話室に入つて、オルバニーと話をした。彼はそのドアの入口に頑張つて見張番を

してゐた。……恐らくその數分間の通話は、彼に十年の長さを感じさせたであらう。

ツリーはドアをあけて出た。

「知事は再候補を斷念したよ」

「有難うございます。そこで唯つた一つのお願ひがありますが……」

彼は熱誠を表に現して言つた。「暫くの間、その一件を、あなたの帽子の下へ仕舞つて置いて頂きたいのです。お願ひです」

彼は最後の言葉に力をこめていつた。

「アハ、、、、、よろしい。」

ホテルには澤山の人がゐた。彼はことさらに平氣を裝つて、玄關に出で、建物の角を曲ると急に飛鳥の如く五丁の距離をサラトガ支局にかけつけた。

「特急報だ！」彼は電信技手の所へかけつけて斯う言つた。通信はピタリ中絶して、特急報が合同通信の紐育本社に打たれた。それはヒツギンスの再起斷念とヒューズの立候補指名を豫斷したものであつた。

午後三時、合同通信系の各新聞紙はバツファローからマンハツタンに渉つて同州全土にこの特電

を蒔き散らした。

その號外を見て、他社の記者連は雲の如くオルバニーの知事の邸宅を訪づれ、その眞僞を確かめようと、いきり立つてゐた。

しかし各社はこれに就いて午後四時まで一行の記事も書けなかつたし、四時になるまでその眞僞も判らなかつたのであつた。四時になつて知事がタイプライターに打つた約二十語の書面を各社の代表者に渡し、立候補斷念を宣言したのであつた。

その時、サラトガの本部ではヒューズの立候補が發表された。

七　選擧運動費公表

上

「選擧運動費の公表」は千九百八年、米國民主黨がデンヴァーに大會を開いた時決定した政綱中の主なる一項であつた。大會は共和黨の大統領候補者タフトに對して、ネブラスカの聖人ブライアンを民主黨大統領候補に指名した。

ブライアンは共和黨に對して、選擧費寄附者氏名の公表を要求し、音に聽えた雄辯を以て天下の

視聽をこの一點に集中せしめたのである。

「我黨は運動費の出所發表を共和黨にのみ要求するものではない。民主黨は十月十五日を以て之を發表することを公約する。故に共和黨も亦同一行動に出でんことを望む」……ブライアンは斯く叫んで、ルーズヴェルト並にタフトに向つて舌戰の巨彈を投じた。

大統領選擧戰の前哨戰として全國民の注目はこのリストの發表に集つた。ブライアンが公約の十月十五日が近づくにしたがひ、共和黨に對するブライアンの迫擊はいよ〳〵急に、米國政界の空氣はこの運動費寄附者氏名發表の一事を中心として異常の緊張を示した。

一般の空氣の緊張にも增して一層の緊張を加へたものは、各新聞及通信社の競爭であつた。各社は、近く公表されんとする寄附者のリストを如何にして「第一」に入手せんかと最善の努力を盡したのであつた。

さりながら、その結果は必ずしも「苦心」と「努力」との分量のみによつて定まるものではない。この時、聯合通信社の一記者が驚くべき手腕を示したのであつたが、それは殆ど僥倖とも謂つべき不可思議な運命の手によつて成されたのであつた。勿論かういふ場合でも、その機會を捉へ得た記者が優秀な頭腦と機智の持主でなかつたなら、出來難い藝當であつたのはいふまでもない。

各社は敏腕な記者を要所に配置した。聯合通信者ではA記者をブライアンに附し、B記者を民主黨幹事長のノーマン・マックに附けた。マック幹事長は紐育からシカゴに行くので、B記者はマックに隨つて俱に旅行した。長い道中のことゝて、マックもB記者を好い話相手として、シカゴへ着いた時は可なり打ち解けた仲になつてゐた。

いよ〳〵リスト發表の十月十五日が近づいた。その四日前のことである。シカゴ民主黨本部の最も信任あるタイピストが、發表すべき寄附者氏名表を三通作つた。一通はマック幹事長が保管した。マックはこれをチョッキの內側のポケットに忍ばせて置いた。次の一通は書留郵便でセント・ルイのウエットモーア大佐に送付された。大佐は百萬長者で民主黨の財務を司つてゐた。殘る一通は紐育の民主黨會計總長リッダー宛に書留郵便で送付されたのであつた。

恰度その翌日の午ごろ、聯合通信のB記者が、シカゴの同社支局員と一緒に民主黨本部へブラリとやつて來た。

B記者は支局員を玄關に待たせて置いて、案內もなしにマック幹事長の事務室へ入りこんだ。そこには誰もゐなかつた。彼は幹事長のデスクに近づくや、手早く吸取紙を持ち上げた。見よ！　マックが持つてゐる筈の氏名リストの原稿が、ちやんとそこにあるではないか。

彼は偶然にそれを發見したのではない。彼はリストがこゝにある事を豫知して來たのだ。彼はマック幹事長附ではあつたが、しかし、たゞ一マックのみに注意を奪はれてゐたのではない。彼は親友を利用した。その親友といふのは、民主黨の最高幹部の一人で、今度のリスト作成にも與つた男である。親友は密かにその事を敎へて呉れた。そして絕對にその名を發表しないといふ約束の下にこの祕密の鍵を握つたのであつた。

約二十分間、B記者は書類の引寫しに汗を流した。一枚々々それをポケットに入れては、あとをあとをと寫して行つた。

下

聯合通信のB記者は天下を驚倒さすべき特種を、そのポケットに收めて、悠々と民主黨本部を出た。

シカゴの支局に歸りつく間も、彼はその發表の方法や他社を出し拔くべき方策を胸の底に描いてゐた。若しこのニュースがシカゴ電報として發表されゝば、疑ひは當然自分にかゝり、延いてはマック幹事長や親友にも迷惑を及ぼす。これを紐育種にして同地で號外として印刷させ、それが電報

として各地に打電される時間の關係を綿密に考へて、他社をして一指をも染させぬ確信がある。

彼は支局の電信部へ行つて、小聲で掛員に言つた。

「紐育の本社へ特急！　民主黨寄附者氏名表を手に入れた、これは是非とも紐育種として發表したいと傳へて呉れ」

掛員はその通り打つた。折返して、

「萬歲！　すぐ送れ！」

といふ返事、引續いて電信のキーがいそがしく鳴りつゞいた。

寄附者の氏名といふのが百弗の小額まで完全に金額と氏名とが傳へられたのであつた。

紐育の聯合通信系の新聞社では午後三時の號外の第一面に完全にこのリストが發表されたが、他の通信社系統の新聞は一行も報道することが出來なかつた。天下の注目を惹いたこのリストは斯くして、ブライアンの公約三日前に聯合通信によつて天下に公表されたのである。

その日の夜七時、B記者は何喰はぬ顏をして民主黨本部に行つて見た。そこには驚くべきエキサイティングな光景が展開されてゐた。マック幹事長は「出し拔けの發表」に興奮せる各社の記者に包圍されて極力辯解につとめてゐたが、記者團の憤怒は容易に解くべくもない。既に數時間の追窮

に逢うて、尙ほ放免されずにゐたところであつた。

B記者は各社の記者の仲間入をして幹事長に喰つて掛つた。

「一體どうしたんです、あなたと一緒に三ケ月もゐて、その揚句に巧みに出し抜かれるなんて、あんまり思ひやりがなさすぎるぢやありませんか、私も社の方は首になるでせうよ」

と眞顏になつてやりこめた。

マック幹事長は返答に窮した。

何故ならばこの報道は紐背が出所であることは明瞭であつた。元來シカゴの本部で發表すべきものが紐育で洩れたのであるから——と誰もがさう思つた——マック幹事長が記者團に對して申譯ないのは無理もない。

マックは自分のリストが偸み寫されたのだとは夢にも知らない。だから種の出所は紐育である。紐育とすれば三通のリストのうち一通を送つた民主黨會計總長リッダーの外はない。リッダーは洩らす筈がない。さうすればリッダーの祕書より外に洩らす者はない筈である。さうだ彼奴より外に洩れる譯がない、畜生！　免職させてくれる！　——マック幹事長はさう考へてゐた。

一週間は夢の間に過ぎた。B記者は幹事長と晩餐を共にした。その間、民主黨本部ではプライアンの公約の如く、十月十五日に寄附者氏名を發表したが、そんな厲つた種に未練を殘す新聞記者は一人もゐなかつた。

マックは記者と飯を喰ひながら、慰め顏に、

「仕方がない、君には實に氣の毒だつたが、その代り紐育へ歸つたら、アノ祕書の奴を屹度免職して見せるよ、あいつより外に犯人はない筈だから。さうして、それが君等に對する唯一のお詫のしるしにならうといふものだ」

マックは斯ういつて淋しく微笑んだ。

「それだけは、およしになつて下さい。今だから白狀しますが、實は私がやつたので、紐育へはこつちから電報を打つたのです」

B記者はさういつて笑つた。

「ナアーンだ、君かい……」

幹事長は文字通り開いた口がふさがらなかつた。持ちかけたコーヒーの匙が受皿の上へ輕く落ちた。

「そりやさうです。しかし種明しだけは御免を蒙りますよ」（一三・七・三〇）

或日の夢

1 祕密の島

「すると日本の陸軍や海軍は先方の眼中にないんだね」

「陸海軍が眼中にないといふよりは、陸海軍で戰爭をする積りが無いんだ」

「ぢや結局戰爭をする積りが無いといふ譯かね」

私は野田にかう反問した。先刻からもの〻一時間も日米關係について議論をた〻かはした揚句である。ハーディングが提唱した五國會議や太平洋會議について、私は日本が非常に不利な立場に陷つたことを憤慨して、場合によつては米國に對して一大決心をしなければならないことを主張した後である。

「君は誤解してゐる。米國航空省の某少將は、日本をやつつけるのに軍艦も兵隊も入るものか、飛行機だけで澤山だと、昵懇の部下に洩らしたといふ事がこの報告にも書いてある」

斯ういつて野田は卓の上に置いた書類を右の手で叩いて見せた。

「けれども飛行機ばかりで日本襲擊が出來るといふのが信じられないぢやないか」

「其が此祕密報告の要點だ。君だから話すが、無論祕密は絶對に守つて吳れなくては困るが……」
野田はかういつて私の顏をジットみつめた。
野田理學博士といへば飛行機研究の權威で、米國通で、平和主義者として知られて居た。父から受けた莫大な遺產を人類の幸福の爲に使ひたいと云ふのが彼の希望であつた。
二十世紀の人類が爲すべき最大の仕事は戰爭を絶滅することだと口癖のやうにいつてゐる。彼が日米關係を憂へて米國に設けた情報機關は、政府でも非常に重きを措いてゐるもので、米國の軍事上の祕密計畫や發明などの報告は政府のものよりも詳細で迅速なのが常であつた。
私はこれまでいろ〳〵の祕密を彼から聽いたが、絶對に祕密を守れと云ふ彼の言葉を聽くのは、今度が初めてゞあつた。
「無論誓つて祕密は守るさ」
私は緊張した面持で野田に答へた。
「その祕密といふのは……」野田はかういひながら、傍の手筥から別な書類を取出した。
「先づその航空軍の組織からいふと、素晴らしく大きな飛行機母艦、それには大小各種の飛行機三百臺を積むことが出來る。その母艦が百臺、これに積む飛行機三萬臺がこの八月中に完成することになつてゐる」
「母艦といふのは矢張り軍艦の一種だらう」
「さうぢやない、その母艦が飛行機を乘せたまゝたつた二十四時間、途中無着陸で日本の空へ飛んで來るのだ。そして母艦は非常な高空にゐて、飛行機だけを飛ばせるのだ。それ等の飛行機は母艦の上から飛揚して、偵察だの爆彈投下だの毒瓦斯撒布などの役目をするのだが、最も驚くべきことは、飛行機には搭乘者が無く、全く電波によつて母艦の上から自由自在に操縱されるといふことだ」
私は半信半疑であつた。
「それ程の大計畫が全く祕密裡に完成されやうとしてゐることは一寸信じ難いことだが……」
「さうだ、その策源地が大陸にあるとすれば、無論祕密は保てない。しかし、それは太平洋沿岸の某州から××哩の海上に先年米國海軍が發見した我が四國大の島を根據地として行はれてゐるのだ。無論その島の發見は新聞にも出ず地圖にものらず、凡てが祕密に附せられてゐる」
私はこれを聽いて先年自分がシアトル桑港間を沿岸航路の船で往復した時、或る場所が往復とも必ず眞夜中に通過するやうな時間割になつてゐるのに不審を抱いたことを想ひ出した。

「しかもその飛行が可能だといふことは、數年來、郵便飛行の名の下にアラスカからカムチヤツカの空へまで掛けて行はれて、確實な經驗を經てゐるといふのだ。だから萬一國交が斷絶すれば、我が陸海軍が未だ一兵をも動かさない前に、日本の首府は忽ち墓場のやうになつて了ふのだ」

野田は斯う云つて飲みさしの炭酸水をグツト一息に傾けた。彼の顏には悲痛の色が漂つてゐた。

逃げ場を失つた小羊が猛鷲の襲擊におびえてゐるやうな日本の姿が、まざ〳〵と私の胸に浮んだ。

暮方の涼しい風を身に浴びて、私は野田の門を出た、夕燒が西の空を染めて血のやうに紅かつた。

この夜、私は黑い翼を擴げた惡魔のやうな飛行機の幻影に惱まされて、まんじりともしなかつた。

どこかの鷄の聲が曉の沈默を破つて、萬象が眠りから醒るころ、終夜の疲れが私を遠い眠りの國に誘つて行つた。

2 最後の日

何時間眠つたか自分では判らなかつたが、陽は可なり高かつた。私は西洋室の中で、大きな安樂椅子に身を埋めるやうに凭れてゐる。鬱蒼たる森を背景にした英國風の庭には、青毛せんのやうな芝生がなだらかな起伏を蔽うて鮮かに擴がつてゐた。右手の大花壇には見事な薔薇の花が今を盛りと咲き亂れてゐた。開け放された出窓から、夏の朝のすが〳〵しい空氣が馥郁たるローズの香を送つて來る。

私は深い呼吸を一つして、手近な卓上からシガーを取つた。香氣の高い紫の煙が、部屋の中をゆるやかに棚びいて窓の外に消え行く姿をボンヤリと見送つてゐた。

その時、空の一角にチラと動く何物かを認めた。それが確かに飛行機の群であることを知つた瞬間に、私は電氣にうたれたやうなショックを感じた。

「とう〳〵最後の日が來た！」

私は思はず絶望の聲を上げた。

飛行機の數はだん〳〵多くなつた。暫く空を見つめて居ると、これまで見えなかつたものも判然と見えて來た。それ等は一瞥して日本に無い所の型であり、また西洋の新聞雜誌でも曾て見た事のない種類である。それが鳥のやうに、とんぼのやうに、または蝙蝠のやうに、惡魔のやうに、大空

を我物顔にかけ廻る有様は、壯觀といつてこれほどの壯觀を見た事はない。併し今はこの壯觀を壯觀として感賞してゐるやうな呑氣な場合ではない。野田博士の受取つた祕密報告は矢つ張り本統であつたのだ。でも斯くまで早くこの戰爭が實現されやうとは全く意外であつた。

さうする內に空が俄かに暗くなつた、と見ると巨大な飛行船が日光を遮つて飛んで來るのであつた。超努級艦に羽が生えて空を飛んでも、これほど物凄くはあるまいと思はれた。あれが例の飛行機三百臺を搭載して、それを自由に操縱するといふ米國の飛行機母艦なのであらう。アヽ國交は遂に破れたのであるか。

私は双眼鏡を取つて空の形勢を注視した。もう日本の飛行機が出て來て、空中戰爭が始まるだらう。それにしても敵が何故に爆彈を投下しないのだらう。事によると今方に偵察中であるかも知れない。この機會に日本軍が何故に飛行機射擊砲を以て彼等を攻擊しないのか。どうせ勝算はないにしても、幾分でも敵に損害を與へずに、見す見す毒瓦斯や爆彈の犧牲になるのは忍び難いことである。一體吾が空軍は何をしてゐるのか。……私の思ひは千々に亂れた。

今まで眼に全身の注意を集めてゐた私は、自分の耳が飛行機のエンヂンから起るけたゝましい爆音プロペラーの廻轉から起る恐ろしい唸り聲を聞かなかつたことに氣がついた。あれだけ多くの飛

行機——一瞥何百臺といふものが、空を蔽ふてゐるにも拘らず、鳥が空をかける羽ばたきほどの音も聞えない。斯うまで進歩した飛行機の下に、我帝都はいま斷頭臺上の囚人のやうに、靜かに死を待たねばならぬ運命にある。

斯く考へた瞬間に、私は自分の周圍のことを思ひ出した。既に結納まで取かはしてこの水曜日に結婚式を擧げるまでになつてゐる我愛人春子は今どうしてゐるだらう。數年來待ちに待つたその婚禮の日も永久に去つて了ふのであらうか、私の結婚を最後の樂しみのやうにしてゐる老たる兩親、同情に富む兄の夫婦、その家庭の花である三人の無邪氣な幼子、それ等を包容する平和な家庭……さうした家庭の幾十萬から成立つこの大都會、それに住むところの罪なき生命の凡てを擧げて、惡魔の餌食に供へるとは何といふ情ないことだらう。……涙が頰を傳はつた。

私は一同を呼ばうとしたが、咽喉がつまつて聲が出なかつた。

その瞬間、私は眼の前の光景が全く一變してゐるのに愕きの叫びを上げた。

3 未知の世界

双眼鏡を手にして熱心に空を見上げてゐた時、私は何處にゐたかをさへ知らなかつた。何時安樂椅子から起き上つて、どうして室外に出て來たか、それは興奮の極、恐らく無意識の間に行はれたのであらう。

いま私は小高い丘のやうな所に立つてゐる。よく見ると、それは幽邃な公園の一部であるらしい。規模の大きさは一寸想像がつかないが、何しろ素晴しい美しさである。上野、芝、日比谷などの公園——若しそれが公園と云ふことが出來るなら——それ等のものはこの公園の僕のやうなものである。設備の心地よく行屆いてゐるところは、どうやら西洋の公園らしくもあるが、その樹木のたゝずまひは何うしても日本固有のもので、時代も可なり付いてゐる。奈良や京都のお寺の庭を一つ處に寄せ集めて、其れに極く進んだ文明的設備を施した——とでもいつたら、その美しさの幾分でも想像させ得やうか、たゞそれを眺めるばかりの庭としないで、人の群がその自然のうちに融け合つて一層その風景を引立てゝゐることが、この公園の生命とも云へやう。樹蔭といふ樹蔭のベンチや芝生には盛裝した西洋人らしい男女の群が、いかにも樂しげに憩うてゐる。青々とした芝生の間を美しい曲線を描いた坦々たるドライヴ・ウエーが帶のやうに丘を繞つて、家族づれの樂しい群が馬車や自動車を驅つてジョイ・ライドを試みてゐる。

遙か彼方の松原を通して、海の水が碧く光る間を、ヨットの白帆が數限りなく隱見する。白や赤やいろ〳〵の色彩に塗られたモーターボートが長い浪の尾を引いて行き交うてゐる。海岸のプロムナードには三々五々散歩する人々の群が右に左に動いてゐる。妙なる音樂が綠の森に響いて時々急霰の如き拍手の音が聽えて來る。優雅と嚴肅との表徵とも見るべき遙か彼方の建物が、その音樂堂なのであらう。

凡てが、全く平和の光景である。私は曾て西洋の公園に於ても見なかつた美しい樂園をこゝに見出した。それにしても彼等はどうしてこの恐るべき空中の光景に無關心でゐるのであらう。

私はそれを確めようと決心した。近くのベンチに腰うち掛けて樂しげに話し合つてゐる上品な老人と、その令息令孃であるらしい三人連れに近づいた、そして大聲で、

「戰爭が始まつたのではないでせうか」と突然に言ひながら、空の方を指して見せた。彼等は非常に驚いて一齊にベンチから起ち上つた。併し彼等の驚いたのは空の光景そのものゝ爲ではなくて、私の無躾の態度にあつたらしい。

六ツの眼は同時に探るやうに私に向つて注がれた。彼等は如何にも不思議なものを見たかのやうに私を見つめてゐたが、老人の眼光が、先づ和らいで來た。三人は暫し何事をか囁き合つてゐたが

再びこちらを向いた時には、各々の眼には私に對する憐憫の表情があり〳〵と讀まれた。

戰爭の心配で興奮し切つてゐる私には彼等の態度が不思議で堪らなかつた。私が再び問を發しようとした時、老人は靜に口を開いた。

「失禮ですが貴方はどちらからお出になりました」

その態度は子供か病人にでも對するやうに物優しかつた。私は何だか狐にでもつまゝれてゐるのではないか知らんと思つた。自分は何處からも來たのではない。東京にゐた積りである。しかもこゝは全く未知の世界である。

4 海濱公園

未知の世界――人々の風俗から庭内の設備までが西洋らしいこの未知の公園で、私が最初に話かけた三人連の人々をよく見ると、確かに日本人である。其風采態度、服裝に至るまで非常に上品で優雅である、何處かに貴族的のひらめきはあるが、その應對ぶりは實に平民的である。いや平民的といふよりは平民そのものである。私は老人の問に對して自分は東京の者である旨を答へた。そし

て、

「一體、こゝは何處ですか」と反問した。

「東京の方でこの公園をお存じないのは不思議です。若しや貴方は永い間遠方へでも御旅行になつて、今朝御歸りになつたばかりではないでせうか」

老人の問ひは實に意外である。事によると自分を敵の間諜か何かのやうに思つて警戒してゐるのではないかとも考へて見たが、さうらしい樣子は露ほども見えぬ。私は何と答へていゝかを知らなかつた。浮かり物を言つて取かへしのつかぬやうなことになつては困ると考へた。そこで老人の問には答へずに、

「この公園の名は何といひますか」ときいて見た。

「俗に海濱公園と申します」

海濱公園、成るほど海が見えるから海濱公園には違ひないが、自分の知る限りでは東京中に海の公園は一つもない。

「一體いつ頃出來たのでせう」

私はそれを尋ねないではゐられなかつた。老人はしばらく考へてゐたやうであつたが、

「さあ、何年位になりませうか隨分古いものです、彼れこれ百年にもなりませうか」
出來てから百年にもなるといふこの公園を自分が全く知らない筈はない。
「すると德川時代に出來た勘定になりますが……」
「德川時代？　飛んでもない、德川の末期からでも今日までは二百年近くになります」
「では今は一體何年なのですか」
と云ふ言葉が、浮つかり自分の喉まで出かゝつたが、ハツト氣がついて辛うじてその言葉を口の中で嚙み殺した。
「しかしこの公園の樹木や泉石の古びは百年や百五十年ではないと思ひます、少くとも三百年ぐらゐ經たなければこれだけの古びは付かぬと思ひますが」
「お眼の高いのには敬服です、こゝが公園となつたのは百年位ですが、その最初は矢張德川時代に建設されたもので、明治から大正へかけて離宮になつてゐたのを東京市民の爲に皇室から御下付になつたものと聞いてゐます、ですから俗に海濱公園と申しますが、恩賜公園とも、お濱公園ともいひます、最もその後周圍の土地を取入れて今では千エーカー近くの廣さになつてゐます」
「それならば、つい此間まで、こゝを鐵道の荷物置場にするとか魚市場にするとかいつて騒いだ所

ぢやありませんか」
老人は非常に驚いたといふ表情で、
「この公園を荷物置場に？　魚市場に？」
といつて繁々と私の眼を見た。私はどうも狂人扱ひにされてゐるのではないかとも思つた。しかし年代の相違に氣がついて見ると、飛んでもないことを言つてしまつたと思つた。さうだ、自分はリツプ・ヴアン・ウインクルのやうに一夜眠つたと思つてゐたのに、百年も飛び越して二十一世紀の日本に來てゐるのだといふことに氣がついた。

5　羽織と袴

この公園が、もとの御料地であり、いまの時代が大正十年から百年も過ぎた後のことであると判つて見ると、自分が心配した飛行機の群も別に米國から戰爭に來た譯でもなささうである。
しかし、過ぐる百年の間に隨分驚くべき變化が、あらゆる方面に起つてゐることだらう。それを見るのは非常な樂しみであるが、自分には歸るべき家もなければ、泊るべき宿屋もない。それに皆

目勝手が判らない。近づきになつたのを幸ひ、この老人や青年男女達から教へを受けようと思つた私が口を開かうとすると、その娘らしいのが老人に向つて何事か囁いてゐる。

「……大變お疲れのやうですし、それにお召物もなんですから、お差支がなかつたら宅へお伴れ申したらいかゞでせう」

低い聲ではあつたが、「お召物」といふ言葉に私はハットして自分の着物を見た。事によると寢卷を着てゐたのではなかつたかと思つたが、幸ひにも私は夏の衣服として恥しからぬ程度の羽織、袴もつけて俎板のやうな足駄を穿いてゐた。

それがこの場合、彼等の服裝の單純で高雅なのに比べて、非常に奇妙なコントラストであり、何だか百年前の芝居をする爲に舞臺にでも出てゐるやうな間の惡さを感じた。

自分が歌舞伎芝居を見る毎に起した感想――社祢や長袴をつけた武士や大名の衣裳を見て、昔の人は能くあんなものを平氣で着てゐたものだと思つた――と同樣に、今の人達が私の姿を見てゐるだらうと思ふと、穴へでも入りたいやうな氣持がした。

しかし一同は、さうした事に輕蔑の念を持つてゐる樣子は少しもなかつた。そして老人も青年も娘の提議に贊成したらしい。

「どうです、大分お疲れのやうですからお厭ひなくば、私の宅へ入らしつて、ゆつくり、お話を伺はうぢやありませんか」

老人は打ちとけた態度で斯ういつて、青年男女を私に紹介した。

「これは私の長男の平太郎です、こちらはその妹の美代子です」

私は自分の名を名乘つて、叮嚀に帽子を取つてお辭儀をした。二人は少なからず面喰つて、握手しようとして出しかけた手のやり場に困つてゐた。私は失敗つたなと思つた。

「お名前は承りましたが、御苗字は……」

私はテレ隱しに斯う尋ねた。

「これは失禮、私はかういふ者です」といつて、老人は名刺を呉れた。「野田廣之」と書いてある。私は友人の野田博士の事を思ひ出して、何となく親しみを感じた。

三人はともぐ〳〵に自分達の宅へ來いとすゝめて呉れた。實に願つてもなき幸ひである。

「では遠慮なしに御厄介になりませう」所でお住居はどちらです。

「輕井澤です」

「えッ、輕井澤？　と申しますと、あの信州の……」

「えゝさうです」
「では東京見物にでも入らしつたのですか」
平太郎と美代子が可笑しさをこらへて、うつ向いた。私はまた失敗つたなと思つた。
老人は氣の毒さうに、
「私共は夏の間毎日輕井澤から東京へ通つてゐるのです」と説明して呉れた。
「これから輕井澤までは隨分大變ですね」
「なに輕井澤あたりは東京の郊外も同様です」
私はこの意味が飲み込めなかつた。それを尋ねて、また恥をかくのも業腹だと思つたので、搦手から問を掛けて見た。
「どの位時間がかゝります」
「十五分か二十分です」
老人の答へは速かであつた。私は開いた口がふさがらなかつた。

6 胸の動悸

輕井澤まで二十分と聽いて私は例の質問癖を出さぬ譯には行かなかつた。
「どうしてそんな事が出來るのです。急行列車でもトンネルだけに二三十分はかゝるでせう」
「汽車ぢやありません、飛行機です。ほんの一飛びです」
平太郎は時計を出して見た。
「たつた三分前に直江津行が出て了ひました。もう二十分たてば此次の乘合が出ますが、お客さまがお疲れのやうですから一臺雇ひませう」
この服裝で乘合飛行機の客となつたら、定めし注目されるだらう。そこを氣を利かして呉れた、平太郎の好意を、私はうれしく思つた。
四人は打つれて公園の丘を下つて平坦な廣場に出た。數十臺の飛行機が、そこに列んでゐたが、みんな約束濟みで、或るものは客を乘せて飛ばうとしてゐる。
平太郎は廣場の一隅にあるコンクリートの高い柱に近づいた。柱には電鈴の釦らしいものが何百

と列んで取つけられてあつた・平太郎が其うちの一つ・二〇一番といふのに手を觸れると、一分と立たぬうち一臺の飛行機が鳥の舞ひ下る樣に廣場に降りた。それには矢張二〇一の番號が打つてある

「私達の飛行機が參りました乘りませう」

飛行機が墜ちるものだといふ苦い經驗が身に滲みてゐる私は、何となく胸の動悸の高まるのを覺えた。殆んど決死の覺悟でその中へ入つて見た、八疊敷ほどもあらうと思ふ部屋は一等車の中よりも遙に美しい。五人乘といふのには恐ろしく、ゆつくりしたものだ。中央に小さな卓子があり、その周圍に安樂椅子が五つとソーファが一つ置いてある。安樂椅子は回轉自在で、好きな方向に向けられるやうな裝置になつてゐる。ドアを開けると隣に洗面所と便所がある。汽車のよりも廣くて心持がよい。これで搖れさへしなければ旅行も實に愉快になつたと思つた。

たゞ自分の腑に落ちないのは、平太郎が釦を押すと、何處からともなく飛行機がやつて來た事だ

それを老人に質問すると、

「あの柱の頂きには無線電信が裝置してあつて、こちらで釦を押すとそれが直に飛行機の無線電信に感じるのです。飛行機の番號によつて符號が違ひますから、呼ばれた飛行機は直にそれと感づく

のです」

「それで・それ等の飛行機はどこにゐるのです、あんなに早く來られる所を見ると、何處か近くに格納庫でもあるのですか」

「この頃の飛行機には格納庫といふ樣なものは要りません、御覽の通り翼が無いでせう、そして滑走なしに直上しますから・飛行場といつたやうな、だゝッ廣い地面も要らないのです、大抵はこの近くの事務所建築の屋上を借りてゐます。大きな建物になると、この位の飛行機は屋根の上に三百臺位は樂に並びます」

私が老人と斯んな話をしてゐる間に、何だか飛行機が動き出してゐるやうに思はれたが、少しの動搖も感じない。

私は窓から首を出して外を眺めてゐた美代子の後から、

「いつ飛行機は出たのですか」

と尋ねた。

「私共が乘るとすぐです。そら・あすこに見えるのが碓氷峠です」

私が窓から覗かうとしてゐるうちに、飛行機はどうやら下降するらしく感じた。眼の下には西洋

の都會のやうな晴々しく美しい町が擴がつてゐた。

7 かるゐざは

輕井澤の町を瞰下した時私は西洋の都會にでも來たのではあるまいかと思つた。もと〳〵西洋人によつて開かれたこの町が、西洋風であるのに不思議はないが、昔の面影と比べて何んといふ變り方であらう。

「序ですから上空から輕井澤附近を御覽になりませんか」

老人が私にすゝめて呉れた。

「大變結構です、是非お願ひしたいものです」

私は感謝の心を以て答へた。

老人は電話機に口をあてゝ運轉手に何事をか命じた。

降りかゝつた飛行機は再び少し上騰して、輕井澤市街の上空を、ゆるやかな圓を描いて舞ひはじめた。

陽氣は可なり凉しかつた。淺間山が懐しくも雄大な姿を昔のまゝに見せてゐるのが、涙の出るほどうれしかつた。雲場の原の霧海、プロスペクト・ポイントと云はれる矢ケ崎山、それに續く碓氷の峠それ等の大自然の懐に抱かれて輕井澤の町は、青い天鵞絨の上に五色の積木をまき散らしたやうに擴がつてゐる。昔から淺間根腰の三宿といはれた輕井澤、沓掛、追分は、離山の麓を縫うて人家が帶のやうに續いてゐる。

「エライ變り方ですな」

私は平太郎に話し掛けた。平太郎は無言のまゝドアを開けて、部屋の外側にあるデッキの上へ私を連れて行つた。

デッキからの展望は實に素晴らしいものであつた。老人も美代子も出て來て、私にいろ〳〵の說明をして呉れた。

それによると昔の三宿は輕井澤市のうちに編入されて、もとの名をそのまゝに三區に分けてある。また夏の定住者は十五萬人、日歸りや泊り客を合せると、平均一日三十萬人以上になるとの事であつた。

「この邊一帶は國立公園になつてゐますから、國庫から年々莫大な支出をしてゐます」

「それにしては別に大した設備もしてないやうですが」
私は昔のありさまと餘り變りのない、この附近の大自然を眺めながら言つた。
「勿論です、神樣の傑作であるこの邊の自然を、そのまゝに保護するといふのが國立公園の趣意ですから、一本の樹、一莖の草でも、それを絕やさないやうにする爲に莫大な費用がかゝるのです」
「するとこの邊を國立公園にしたのは、それを出來るだけ原始のまゝの狀態にして置かうといふ譯ですね」
「その通りです。二十世紀までの人間は、自然を壞すことを文明と思つてゐたのです。しかし、それは自然に對する冒瀆であると同時に、造物者に對する反逆です。吾々は吾々の祖先が重ねて來た罪の償ひをしてゐるのです」
私は何だか、自分に對して皮肉を言はれたやうに感じた。
「ですが道路は大變幅が廣くなつて立派になつたやうに見えますが」
「人工的の仕事といつたら道路を完全にした位でせう。御覽なさい、あの百呎幅の大道路の上を輕快に走つて行く自動車を……まるで蟻の行列のやうぢやありませんか」
「東京などはどうでせう。少しは道路が善くなつたでせうか」

「少しは？」……
平太郎は意外だといふ風にいつて、
「東京は明日でも御案内いたしませう」
斯んな話をしてゐるうちに、飛行機は一巡を終つたらしい。老人は家の番號をいつて、その近くに着陸するやうに運轉手に命じた。
私が老人に續いてデッキを降りやうとした刹那、飛行機が急角度を以て方向を換へた。そのはずみに足許が狂つて下駄が梯子の間に挾つた。アッと思ふ間に私は階段を踏み外して毬のやうに空中に投げられた。

8 腹を抱へて

飛行機のデッキの階段から投げ飛ばされた私は、次の瞬間に飛行機の外側にぶら下つてゐた。無意識の間に兩手は何か綱のやうなものを握つてゐたが、それがずるずると下にさがるので、私はもう最後だと思つてゐた。と、急に二三十尺も落ちたかと思ふところ、その綱に手答が出來て、上の

方から引ばつてゐるものがあるやうに感じた。身體が空中に浮いて靜かに下に降りるやうである。上を見るとズツと遠くの頭の方に大きな傘のやうなものが廣がつてゐる。ハ、ア落下傘だなと感付くと、自分の天運がまだ盡きないことを感謝せずにはゐられなかつた。

そのうち段々速力が增すにつれて、下から反對の風を受けると、行燈袴があべこべに半身を包んで羽織は將に天に冲せんとしてゐる、その爲めに下を見ることが出來なくて、ヒヤ〳〵した。折角運よく助かつても、降り場が惡ければまたどんな怪我をしまいものでもない、兩手はジカと綱を握つてゐるから、袴を拂ひのけることも出來ない。全く目かくしの狀態で下へ〳〵と降りて行つた。

急に身體が何物かに抱へられたやうに思ふ、とガヤ〳〵と人の聲がしたが、その後のことは何にも知らなかつた。

氣が付いて見ると、私は美しい寢室でベットの上に横はつてゐた。枕元には美代子が靜かな微笑を含んで立つてゐた。

「お目ざめですか、御氣分は如何です」

彼女は優しい聲で尋ねた。

「有り難う……」

と云つたが、自分はどうして、こゝに來てゐたのかしばらく回想して見た。——飛行機から落下傘で助かつたまでの記憶が蘇つて來た。そこへ老人と平太郎も來て、共々に容體を尋ねて吳れた。

「大變御心配を掛けました。しかし只今は近來にない好い氣持です」

「それや結構です、では御緩くりお支度をなさい。こゝは私共の家ですから、少しも遠慮は入りません」

かういつて三人は部屋を出て行つたが、平太郎が引返して來て、

「お召物を拵えさせて置きましたから、これをどうぞ……」といつて傍のクローセットを開けたまゝ出て行つた。

室の中には凡てのものが整つてゐた。私は西洋の一流のホテルよりも氣持のよいこの寢室で、髯を剃つたり顏を洗つたりした後、自分の爲に拵へて吳れたといふ着物をつけて見た。吾々の時代には見た事のない立派な絹のやうな織物で出來た洋服らしいものであつた。それは脊廣よりも輕快で瀟洒で上品であつた。それに自分の身體に合ふやうにシツクリと仕立られてあるのに驚いた。羽織袴を脱ぎ捨てゝ、この着物を着たとき、自分は始めて、現代（二十一世紀）人になつたやうな氣が

した。

そこへ美代子が來て、私の若返つた（？）姿て見て、

「あら、まあ大變よくお似合になりますわ、私最初兄さんかと思ひましたのよ」といつて、天使のやうな顏に笑を浮べた。私はその時この女が「誰かに似てゐるな」と思つたが、そのまゝ彼女に從つて廣間の前まで來ると、老人と平太郎の笑ひ聲が聽こえる。

二人は新聞を手にして腹を抱へて笑つてゐた。

「何をそんなにお笑ひになつて入らしやるの？」

美代子が聽いた。

「まあ、こゝを見て御覽」といつて平太郎は外字新聞の一面にある大見出しの記事を指し示した。

9 聖代の奇蹟

美代子は平太郎の手から新聞を取つて、その表題を讀むと「あらッ」といつて一寸驚いた樣子であつたが、讀んで行くうちに、堪らなくなつて、可愛らしい口元を惜氣もなく開いて笑ひ出した。

一體何がそんなに可笑いのかと聽いて見ると、斯うである。

新聞記事の表題は「不思議な下駄」と云ふのであつた。私はハツト思つた。記事の內容は、

「昨夜輕井澤區離山附近で一足の下駄が發見された。現代に於ては博物館以外に見ることの出來ないこの下駄が、かゝる場所に發見されたといふことは實に聖代の奇蹟である。

この下駄は恐らく、人が穿いて來て、そこに脫ぎ捨てたものではなく、餘ほど高い處から落したものらしい。其證據には下駄の片方は眞二ツに割れて、僅に鼻緒でつながつて居り、又他の片方は夫から百米突も離れた場所から見出された事によつて、或は飛行機からでも投下されたものかも知れない。

拾得者は早速これを警察に届けたが、非常に珍妙な事件とあつて、署長自ら現場に臨檢し、なほ輕井澤市中の三百八十餘臺の營業用飛行機の運轉手を取調べ中であるが今に眞相が判明しない。

警察署では今朝この下駄を別仕立の警察飛行機で東京の帝國大學に送り、早朝各專門大家の鑑定を請うたところ、この下駄は帝室博物館發行の「明治大正履物圖錄」に據ると、「駒下駄」と稱する物の一種（主として晴天用）で、時代は大正初期——今から約百年前——といふ鑑定であるが、不思議な事には、この用材の桐は下野產の優等品で柾目と稱し、伐採後三年以上を經過してゐないと

いふ事と、顯微鏡檢査の結果、鼻緒裏から下駄の表に附着してゐる脂肪のなま〳〵しい所から、三四十時間前に人間が穿いた形跡があること、尤も其後更に足袋を穿いて用ひたと想像されることは白い布の微細な纖維が下駄の木目と鼻緒裏に附着してゐる事で明かである。

また下駄の裏に附いてゐる土は武藏野特有のもので、そこに喰込でゐる砂は玉川砂利の細粉であるといふところから、東京で用ひたものであらうといふ鑑定である。

しかし警察側の判斷では、犯人――ではない、この下駄の穿人――は、都會の者ではあるまい、何故ならば現代の都會――殊に東京の如き大都市に於て砂や土を踏んで歩るく事は不可能であるからである。しかもこの下駄には土砂のみならず、田の中でも歩いたやうな泥水が下駄の裏から周圍にかけて滲みこんでゐる。

一方大學では下駄に附いてゐる脂肪の分析を營養研究所に依頼したところ、その脂肪は、現代人の食物に比して非常に粗惡な、多分澱粉質――主として米？――を多量に喰つてゐる人間の體内から分泌されたものであらうとの鑑定である」

「これ等の材料を綜合すると、その下駄の穿人は多分、現代日本人が知らない處の山間僻地に殆ど原始的の生活をしてゐる者ではないかとも思はれるが、それにしては年代と時間の上に辻褄の合

はぬ處がある。兎も角近來の大事件であり、これが闡明は學術上にも非常な貢獻を齎すことだから一日も早く眞相を究めて世間に發表するやう努力する積りである」といふ輕井澤警察署長の談話も添へてあつた。

私は可笑しいどころか、少し薄氣味惡くなつて來た。

10 キモノ

私は苦笑しながら、

「下駄一足が大變なセンセーションを起させましたね。しかし私は餘程運がよかつたのですね、大變な御心配を掛けたことゝ思ひますが……」

「心配？」と老人は聽き返すやうにして、

「あなたが死なうとされても死ねないやうに出來てゐるのですから、吾々は別に大した心配もしませんでした」

といつて作夜の事を說明して呉れた。それによると、この頃の飛行機には、昔の電車に救助綱が

ついてゐたやうに、必ず一種の網が張つてあつて、飛行機から飛び降りても必ずその網に引つかゝりその手が自然にパラシュートの綱にからまるやうに出來てゐるとの事であつた。

「でも私のやうに減多に落る者もありますまいし、眞逆わざ〳〵飛び降りる人もないでせうが……」

「ところが、飛行機自殺が一時非常に流行したのです。何んでも最初やつたのは詩人肌の若い娘でしたが、これが新聞に書き立てられると、一つの流行となつて心中をする連中まで出て來たのです。それからまた飛行機上の犯罪といふものが非常に多くなつて空中警察もなか〳〵忙しいのです」

「犯罪といふと、どんな種類のものですか」

「例へば殺して置いて途中に死體を投げ棄てるなぞは、まだ拙劣な方ですが、生きたまゝ突き落されゝば、自殺か他殺かは一寸判斷が出來兼る場合が多いのです。何しろ高空から落ちるのですから死體を檢査しても、證據を擧げるのに骨が折れるです。そればかりか山の中へでも落ちれば白骨になるまで判らない事さへあるのです」

「すると自殺や犯罪を豫防する爲の一種の救助網といふ譯ですね」

「さうです、それで飛行機は法律を以てこの落下傘附救助網の取付を强制してゐるのです」

私はまだ今の世の有樣が能く解らないが、社會主義者の理想鄕のやうな、社會が實現されてゐないことだけは朧氣に悟る事が出來た。

「さうすると私が地についた時分抱いて下すつたのはどなたですか」

「無論私共です、あなたが落ちられると飛行機は一旦ズツト上へ昇りました。さうして大急ぎで着陸して、あなたの落ちて來るのを待つてゐたのです」

「なぜ飛行機がその場合上騰したのです」

「割合に低空でしたから、若し途中で落下傘が開かぬうちに地に落ちれば、無論生命はありませんですから、あなたを綱で引ずつたまゝ――無論その時あなたは下へ落ちてゐると思つたでせうが――飛行機は高く昇つたのです。そして安全を見届けてから、急に一足先へ着陸して待つてゐた譯です」

「ではもう一ツ伺ひますが、私の洋服はどうして、こんなに好く合ふのが得られたのでせう」

私は自分の身體を撫で廻した。

「失禮でしたが、醫者が診察の時に、お身體の寸法を取り、すぐに東京へ註文しました。今朝の一番で届いたのです、しかしそれは洋服ではありません」

「ぢや一體何でせう」
「キモノです。洋服といふ言葉は現代に通用しない死語です。初め西洋から來たからといつて、一々「洋」の字を付けたのは前世紀の事です。昔使つた厭な言葉でいへば日本服とでも言ひませうか、今は世界共通で、しかも日本特有の立派なキモノなのです」
その時、室内の何處からともなく微妙な音樂が響いて來た。三人は申し合せたやうに椅子から立ち上つた。

11 最初の食事

私はまだ、いろ〳〵尋ねて見たいことがあつたが、音樂を合圖に一同が起ち上つたので、私も椅子から腰を上げた。
「食堂へ參りませう」といつて美代子は私の手を取るやうにして先に立つて室を出た。私は美代子と並んで、
「今の音樂は食事の知らせですか」とたづねて見た。

「あれは十二時の合圖です」
「ぢや午砲の代りですね」
「ドンと申しますと……」
美代子は一寸返事に困つた。
「つまりその……十二時を合圖に大砲を擊つことです」
「大砲を？　……何の爲に大砲なぞを擊つのでせう」
今度は私が行き詰まつた。
「それはお前は知らない筈だよ、昔東京では十二時の合圖に大砲を擊つたといふことだ」
父親が助け船を出した。
「あら、さう。隨分怪我人があつたでせうね」
「馬鹿なことを、空砲だよ」
老人がたしなめるやうに云つた。一同は無邪氣に笑つた。
食堂には雪白の裝ひに身を固めた品のよい給仕が、恭しく一同を迎へた。私は老人と平太郎の間に坐つて、美代子と眞正面に顏を合せた。その時、誰かに似てゐるなと思つた美代子の顏から肩の

様子が、自分の許嫁であつた春子にそつくりなのに氣が付いた。

輕井澤高原の絶景が、額縁に嵌めこんだ名畫のやうに食堂の窓から美しく眺められた。清い、冷たい風がそよ〳〵と、カーネーションにあしらつた、アスパラガスの葉を弄ぶつてゐる。銀器と陶器の觸れ合ふ微かな響きが、小川のせゝらぎのやうに耳に快よい。

斯る景圍氣のうちで、私は廿一世紀の最初の食事を試みた。驚異と、刺戟と、食慾と、もう一つ率直に白狀すれば、美代子が共にゐることによつて、食卓の樂しさは一層であつた。食物は殆んど私の名も知らぬやうな珍料理であつた。西洋料理でもなく、支那料理でもなく、在來の日本料理でもないが、凡てが感能を適當に刺戟して、くどくもなく、あつさりもし過ぎなかつた。

「失禮ですがこの御料理は御手製ですか」

「お恥しいことですが、私共は僅三人暮しで、とても手製の料理を食べるやうな贅澤は出來ません」

「では料理屋にでも御命じになるのですか」

「私共は近所十軒が共同で一つの臺所を持つてゐます。そこには一流のコックがゐて、豫め獻立を指定して拵へさせるのです。材料でもコックや給仕人の費用でも一切共同でしてゐるのです」

「では私共の時代のやうに、一軒〳〵が臺所を持つてゐるといふ樣なことは無いのですか」

「そんな餘裕は今の世には有りません、よしあるにしても、この分業の世の中にそんな馬鹿〳〵しい事をする者はありますまい」

「成程、では婦人の手は全く臺所働きから解放された譯ですね」

「それは當然の事です、婦人が自覺しなかつた時代は、臺所働きで生涯を終つたと云ひますが、生甲斐のない話ですね」

「本統にね」

美代子が心底から共鳴したらしくいつた。

「私どもの時代には米を主として食べたものですが、今でも一般の勞働者などは、そんな風でせうか」

「米を主として食ふ？　今時そんな、贅澤は勞働者に許されないばかりか、如何なる階級の人々にも許されません。米を食つて生きて行くといふやうなことは、眞珠を焚いて食ふと同じやうな驚くべき贅澤です」

12 米と藝術

「米を食ふのが何故そんなに、贅澤なのでせう」

私は意外に思つて斯う尋ねた。

「それは斯うです、凡ての農業が機械耕作になつた今日、水田で作る米だけは全部機械の力を借りることが出來ませんから、手作りにする外はないのです。この勞働の尊い、從つて賃銀の高い世の中に手作りの米が、日常生活の基礎である主要食物に適しないことは、丁度手織の反物が一般の着物に向かないと同じ事です。だから昔は米を作ることを農業といつたものですが、今では園藝の一種になつてゐます」

「餘程藝術的になつて來た譯ですね」

「勿論、農作物ばかりでなく、凡そ人の手になるものは何でも藝術品であるべきだといふのが今日の思想です。機械が幼稚な時代には人間が機械の代りを勤めてゐたのです。從つて手によつて作られるものは恐ろしく價格も高いのです」

「昔は藝術家といふ商賣人があつて、他を機械の代りに使ひながら、藝術は民衆的でなければならないとか、藝術の理解力が足りないとか云つたものだ相ですね。そんな時代に限つて本當の天才は死んでからでなくては認められず、一種の商賣人が獨りよがりの事を云つて、藝術を濟してゐたのでせう」

平太郎が思ひの外に猛烈な氣焰を上げた。

「藝術のことは、また緩くりお話を伺ふとして、今の米の問題だ。二十世紀にはどんなでした。」

老人が話しを引戻した。

「私どもの時代には米の價格が一定しない爲に、國民の生活は米價に從つて動搖してゐました。それで米が安くなれば一般國民は喜びますが、さうすると農家が食へなくなる。農家が儲かれば一般消費者が困るといつた風で、米騷動などゝいふ不祥事も起つた位ゐです」

「米騷動の事は私も歴史で見ましたが、今のお話で、米の生産費といふものが其頃から馬鹿高くつくものだといふ事が解りました。」

「あなたの時代に、それに氣がついた政治家や學者はありましたか」

「いや私自身も今伺つて初めて氣がついたやうな譯です。私どもの時代の政府は、たゞ米が高けれ

ば外國米を輸入するとか、安ければ政府が買上るとかいふ目前の智慧しかなかつたのです。しかしどういふ順序で今日のやうになつたのでせう」

「周圍の事情に制せられて仕方なしに米の飯と別れを告げたといふのが實際でせう。今から見ると大戰後の日本人が一番目先が見えなかつたやうです。いつでも大勢に引きずられて、二進も三進も行かなくなるまでは因襲にこだはつてゐたのです。しかし世界の大勢に順應しなければ結局日本が生きて行けないといふ場合には仕方がない。軍隊からしてパンを食はなければ戰爭が出來ない時代になり、それから一般國民が三度のを二度に、二度を一度といふ風にして今日では一日一皿の米料理を食ふのが、最も衛生と經濟に適した生活とされてゐます。つまり今日は世界の生活が共通の世の中です。國民の生活を世界共通の土臺の上に置くといふことが一番經濟的な生活で、これに反した生活が不經濟で贅澤な生活といふ結論になるのです。

「ところで米は只今一升いくら位でせう」

「昔の一升といふと、どの位目方があるか知りませんが、今では一斤十五圓位なものです」

13 倫敦へ

食事が終つて、雜談に花が咲くころ、

「兄さん今日倫敦へ入らつしやる日ぢやなくつて？」

美代子が平太郎に注意した。

「さう〳〵、今日だつたね、では十五時ので立つことにしやう。お父さん別に御用はありませんか」

「ケンブリッヂの同窓會か。シムス君に逢つたら宜敷くいつて呉れ。……それから巴里へは寄らないのか、……ぢや別に賴むこともなかつたやうだ」

老人は葉卷を燻らしながら答へた。

私は折角懇意になつた兄弟の樣な平太郎と別れるのが辛かつた。

「お差支なかつたら横濱見物旁々お見送りをいたしたいものですが……」

私は少しでも名殘を惜まうと思つて斯ういつた。

「横濱？、横濱へ何の爲に行らつしやるのです」
平太郎は怪訝な面持である。
「横濱から船にお乘りになるのではないのですか」
「船で？　昔は船で外國へ行つたものださうですが、今時船に積むのは材木とか鐵とか麥粉とか綿とかいふ嵩高な品物ばかりです。人間は皆飛行機で、品物でも急ぎのものは大抵飛行便です」
私は東京、輕井澤間が十五分か二十分で旅行の出來る世の中を見ながら、何でこんなに迂濶であつたらうと自分ながら可笑しく思つた。
「飛行機は、どこから出ます」
「東京十五時發、倫敦直行です」
「十五時と申しますと……」
「昔の午後三時の事です。今は午前とか午後とかいふことなしに一時から二十四時までになつてゐます」
老人が敎へて吳れた。
「では東京までも御見送りをさせて頂きませうか」

「オミオクリ？」
平太郎も美代子も何の事だか判らないらしい。
「昔は人が立つときに「見送り」といつて停車場や船の中まで、ぞろ〳〵大勢の人が押しかけたものださうだ」
老人がまた說明をして吳れた。
現代には見送りといふ言葉もわからない位ゐ、そんな習慣が無くなつて了つたのかと思つた。
「倫敦には何年位の御豫定です」
私はまた尋ねた。
「何年？　そんなに永くゐる必要もないのです。彼方にゐるのは三日位です。同窓會が濟めば直ぐ歸つて來ます」
「あんな遠方まで行らしつて、たつた三日しか滯在なさらないのですか」
「遠方――といふと月世界へでも旅行するやうに聽えますが、僅か往復一週間の旅行です」
私はことゞ〳〵に失敗した。成るほど、これでは見送りの必要もない筈だと悟つた。
「平太郎、それでも若し巴里へ寄るのだつたら、例のパンを買つて來て吳れ、それから……」

老人はかう云つたが一寸考へて、
「よし〳〵、用事があつたら、また電話を掛けるから」
「では行つて參ります」
「さよなら」
「さよなら」
「では道中お氣をつけ遊ばして御無事にお歸りになりますやう……」
舊時代の挨拶が思はず私の口を辷つて、叮嚀にお辭儀をしやうとして氣が付いた。さぞ美代子が笑ひを噛み殺したことであらう。
時間は十四時を過ぎてゐた。平太郎は旅行鞄の一つも持たずに、隣へでも行つて來るやうな顏でいそ〳〵と出て行つた。やがて十四時十分の乘合飛行機が彼を東京の空へ運び去つた。
老人は十六時から開會の未來倶樂部の例會に出席するといつて、間もなく家を出て行つた。
あとには美代子と私が二人きり取り殘された。

14 日本語新聞

美代子と二人きり取殘された私は、この機會にしんみりと色々の話をして見たかつたが、何から話をしてよいか判らなかつた。それに前世紀の自分と新時代の彼女との間には百年といふ大きな時間の溝が横たはつてゐる。話が充分に通ずるかさへも氣づかはれた。殊に斯うした場合、自分の身の上話などを持出すことが果して無躾でないかどうかも疑はれた。
恰度そこへ新聞が配達された。新聞には少し薄氣味惡い思ひもするが、好奇心から「不思議な下駄」の續きの記事も見たかつた。殊にこの場合何よりいゝ話題の中心が出來たのを喜んだ。
「夕刊にしては少々早いやうですが……」
「東京の十五時版です」
美代子が斯う答へて新聞を擴げたのを見ると、矢張外字新聞である。
「日本字の新聞はお取りにならないのですか」
「日本字の新聞と申しますと、日本語の新聞の意味でせうか」

「えゝさうです。漢字や假名で書いた新聞のことです」
「あら、そんな新聞は今どこにもありませんわ、これが今の日本語の新聞よ」
私は美代子の手から新聞を取つて見た。記事を讀んで見るとロ！マ字である。書いてある事は日本語に違ひないやうではあるが、全體の意味を酌むのには非常に骨が折れる。新しい言葉といふのか、これまで全く自分の知らなかつた言葉が澤山あり、その上英語や佛蘭西語が原語のまゝに使つてある。
「成る程、これが現代の日本語ですか、漢字の廢止論は私どもの時代にも可なり八釜しかつたものですが、今は全くローマ字の時代になつたのですね、しかしこの文の中に英語や佛蘭西語のやうなものが澤山ありますが、どういふ譯でせう」
「それは矢張り日本語なのです」
「併しローマ字と綴り方が違つて、英語特有の綴り方のやうですが」
「さうです、外國語から來たものもありますが、この頃は直ぐにそれがそのまゝ日本語に取入れられるのです。昔はローマ字でも一々これを日本風に綴り直したものださうですが、何でも或る國に特有な言葉があれば、必ずその言葉の元になる事柄とか感情とか物とかゞあるのです。それを態々

さうした事柄に不適當な日本語に直すよりは、そのまゝに使つた方が表現にも便利な譯です」
「さう仰しやれば、吾々の時代にもテーブルとかランプとかいふ言葉は日本語になつてゐたものですが、それにも拘はらず、洋燈とか卓子とかいふ漢字を當はめ、その横にランプとかテーブルといふ振假名をつけたものですが全く愚な話ですね」
美代子は笑ひながら、
「私どもはそれを文字の通辯と呼んでゐます。むかし外國語の解らない人が通辯を頼んで用を辯じた時代がありますが、文字も振假名といふ通辯が附かなければ讀めない時代もありましたのね」
「ハ、ア、なか〳〵面白いお說です。すると世界各國の言葉がさうして段々接近して來たやうに思ひますが、同時に國語が混亂しないでせうか」
「つまり國語が豐富になつた譯です。しかし一般の傾向はまだまだこれに滿足しないで、今では日本人の讀む英字新聞やエスペランド語の新聞は東京だけでも澤山あります」

新聞を手にして二人が話をしてゐるうちに美代子は早くも、そのうちの或る記事に眼を注いだ。

「あら、まあ早い」

といつて熱心にその記事に見入つてゐた。私は下駄の一件が暴露したのではないかと思つて、

「何か出てゐますか」と云ひながらその記事の所へ顔を持つて行つた。二人の頬がすれ〳〵になるまでに近づいて、彼女の肌の温みが惱ましくも胸を刺戟する。

「この記事よ」、といつて美代子が指し示したのは「凉風輸送始まる」といふ表題であつた。

それによると碓氷峠の谷間に大穴を穿ち、それに直徑五米突もあるコンクリート管を埋めて、これを東京に通じ、穴の入口に風車のやうな巨大な送風器を取付け、その回轉によつて、新鮮清凉の空氣を東京に送る工事が出來上つて、今日から送風を開始した所、非常の好成績であると云ふことが書いてある。

「その空氣は東京のどの邊まで送られるのです」

「暖房管のある家では自由に使へます」

「暖房管といひますと……」

冷たい空氣と暖房管と何ういふ關係があるかと思つて、私はかう尋ねた。美代子は美しい眼で私

を見ながら、

「冬の間暖めた空氣を各々の家に送る管です。水道管のやうに暖房管は家を建る時に必ず引込んであります。昔は各々の建物や住宅にこの裝置をしたものですが、今では東京が一軒の家のやうになつて、凡て共同で間に合ふことは大概市營で爲てゐるのです」

「では暖房管を通じて、輕井澤の冷たい空氣を東京にゐながら呼吸することが出來る譯ですね。すると夏は暖房管ぢやなくつて冷房管になるのですね」

「ですから暖房管といふ名前もこの工事が出來る迄で、是からは空氣管といふ名前になるだらうとこの新聞にも書いて有ります」

「ぢや今は冬でも火鉢や炬燵は入らないでせう」

美代子の顔には當惑の雲がかゝつた。彼女は暫く考へてゐたが、

「さう〳〵、いゝものがあるのよ、一寸待つて頂戴」

といひ捨てゝ書齋の方へ行つたが、暫くして一冊の本を持つて來た。

「それは一體何ですか」

「これがあれば、あなたとお話が出來てよ」

彼女は口の中で「ヒバチ」といひながら頁を繰つてゐる。私は下の方から其本の表題を讀んで見た。「日本死語辭典」といふ金文字が鮮かに光つてゐた。私は少し面喰つた。

折から、電話のベルが鈴蟲のやうな音を立てた。美代子は受話器を取つた。

「あら兄さん？　……えゝ……えゝ……、お父さん？、倶樂部へ行らしつてよ、あら、さう？　……えゝぢやさよなら」

16　戀の夕暮

平太郎から電話が掛つた所を見ると、東京で何か差支へが出來て倫敦行を延ばしたのであらうと自分は考へた。

「兄さんからお電話のやうですが何か變つたことでもありましたか」

美代子は受話器をテーブルの上に置いて、

「えゝ飛行機の中で獨逸の學校友達に久しぶりで會つて、是非巴里へ寄れと勸められたから、歸りが遲れるから、お父さんにさういつて呉れといふのです」

「電話は東京からおかけになつたのですか」

「東京は十五時に立つて今頃は滿洲あたりの空を飛んでゐるでせう」

「では飛行機の上から無線電話をお掛けになつたのですか」

「えゝこの頃電話といへば無線にきまつてゐます、有線電話といふものがないのですから、わざ〳〵「無線電話」なんていふのは變ですわ」

美代子はさういつて、につこり笑つた。

その時、妙なる音樂がまた響いて來た。十七時の合圖である。老人は倶樂部で晩餐を取ることになつてゐるので、二人は打つれて食堂に行つた。

食卓に於けるこの一時間は自分に取つて、後々まで忘れ難いものであつた。

「少し散歩をなさらなくつて？」

美代子が誘ひをかけた。

「お伴しましよう」

二人は裏庭の芝生を踏んで丘の麓を繞る並木路に出た。ゆるやかな曲線を描いた細く長いこの道は碓氷峠の登り口まで續いてゐるといふ。

夕暮の風は寒いやうに涼しかつた。二人は暫し無言のまゝで歩いた。その抱いてゐる心には各々別なことを考へてゐたであらうか、または融け合つた一つの魂となつて、たゞ沈默のみがそれを支配してゐたのであらうか。

ふと頭を上ると樹の幹に横長の木の板が打ちつけられて、それには英語でラヴアース、レーン（戀人の小徑）と記されてあつた。それを二人が讀んだとき、美代子が私の顏を見て微笑んだ。

「斯うしてあなたと御一所にゐると昔のことが想ひ出されます」

「どうしてでせう、お妹さんでもおありになつたのですか」

「いゝえ春子です、許嫁です、それが結婚する二三日前だつたのです、不思議にあなたによく似てゐるのです……」

私は言ひ過ぎたと思つた。自分の頰は熱してゐた。

「まあ本統にお氣の毒な事でしたね、でもあなたはまだお若いのですもの……」

さういつた美代子の顏は氣のせいか上氣してゐるやうに見えた。

「何しろ百年も經つてゐますから春子が生きてゐれば百二十六のお婆さんの筈です」

「では春子さんはその時二十六でしたの、私と同い年ですわ、あなたは……」

「百三十二歳です」

「あら、睡眠中の時間は引いて仰しやいよ」

「では三十二です」

私は若々しく力のある聲で答へた。

「ぢや兄さんと御同年よ、本統に不思議ですわねえ」

「不思議といへば、あなたの御苗字の野田と同姓の親友があつたのです。理學博士で野田廣太郎といひましたがね」

「あら、私共の曾祖父も廣太郎ですわ」

17 春子の寫眞

二人は日が暮れてから家に歸つて來た。老人はまだ歸つてゐなかつた。美代子は書齋から分厚の寫眞帖を持つて來て私に示した。

寫眞帖には平太郎や美代子の幼顏の寫眞や、父親の若い時の肖像など、いろ〳〵貼り込んであつ

たが、段々めくつて行つて、或る一枚の寫眞に到つた時、私はあッと聲を立てずにゐられなかつた。

「オ、野田！　オ、春子！」

私の聲はふるへてゐた。美代子は私が非常に興奮したのを見て、

「矢つ張り曾祖父があなたのお友達でしたか」

私は野田と春子とが一緒に撮つた寫眞を指して、

「これが春子です、これが春子です」

と云つて、ふるへる指先で、寫眞を穴のあくほど衝いて見せた。

「あら、それは私共の曾祖母よ」

美代子は驚きの表情で叫んだ。

「あなたの曾祖母さん！」

私はその瞬間、凡ての事情が釋然として解けた。

野田はその時分、私と同じに矢張獨身であつた。同鄕で竹馬の友であり、中學も同級で、高等學校では離ればなれになつたが、不思議に大學でまた同級になつた關係から、卒業後も親しく交はつ

てゐた。其後彼が博士となつたに引かへて自分は依然たる學士であり、學問上の名聲では彼の足許にも及ばなかつたが、戀愛に於てはその勝利者であつた。といふのは野田と自分とは春子の競爭者であつたのだ。彼は戀に破れても、自分を敵視するやうな男ではなかつた。寧ろ自分の婚約の成立を祝福して呉れたのであつた。けれども自分が一朝忽然として世を去つたのか、又は眠りつゞけたのか、兎に角自分といふものが無い以上は、春子が彼と結婚したことは少しも咎むべきことではない。美代子が春子に似てゐるのは爭ふべからざる血筋の現れなのだ。

「失禮を申しました。よく拜見すると、私の勘違ひでした。餘りよく似ていらつしやるものですから、ついなんでした。しかし曾祖父さんは慥に私の親友であつた野田博士です」

私は斯う云つてこの場合を繕つた。

「あらまあ、本統に不思議な御緣でしたね」

そこへ老人が歸つて來た。美代子が早速この話をすると老人も不思議な緣だといつて大變喜んだ。

「時に今晩の未來倶樂部の例會は非常な盛會でしたよ。例の下駄問題が大變皆の興味を惹いてゐましてね。實に面白かつたですよ。けれどもお客さんにお詫びをせなければならんが、實は秘密を守

るといふ約束で、あなたのことを會員一同に話したのですよ、皆んな非常に喜びましてね、明日東京で開かれる大會には是非御出席を願つて一場の講演を願ひたいと云ふのです」

私は全く面喰つた。一體未來倶樂部とはどんな組織の團體かは知らないが、過去の人間である自分が未來倶樂部で話をするといふことが、どういふ譯だか解らなかつた。

「未來倶樂部といふのは畫家の團體ですか」

私は未來派のことを思ひ出してかう尋ねた。

「畫家も文士も學者も政治家も實業家も新聞記者もその他あらゆる職業の人を網羅してゐます」

そんな雜駁な人達が寄つて一體何をしようといふのだらう。

18 未來倶樂部

「未來倶樂部といふのは、一口に言へば未來を研究する團體です」

老人は籐の搖椅子によりながら話し出した。

「これまで過去を研究する學者は澤山ありました。歷史家とか、史學者とか云ふ人達は過去を學問

的に研究しますが、それは畢竟現在及び未來の爲に過去の研究が必要であるからです。ところが歷史家は動もすると過去の爲に過去を研究する弊に陷ちて、未來の爲に適當な判斷と指導を世に與へることを忘れ勝ちなのです。古人の言つたやうに過去は糟であり未來は實なのです。然るに過去を重く見て、未來を輕んずる爲に、世の人は絕えず糟を嘗めて實を捨てゝゐるのです。

「さう仰しやれば吾々の時代には殊にさういふ傾向があつたやうです。さうして未來のことを考へる人々を空想家とか夢想家とかいつて嘲つたものです。理想家といへば餘程善い方でしたが、それも時として空想家の別名に用ひられたものです」

老人は大きくうなづいて、

「そこです、その空想家が世の中に必要なのです。トーマス、エディソンが電球のうちに光を捕へた最初の動機は彼の夢想でした。初めに空想があつて、後に現實がある。だから西洋では漫畫家の空想が科學者の發明に刺戟と暗示を與へたことは非常なものです。有線電話の發明者グラハム、ベルも亦偉大な空想家でした。彼が晩年に苦心した太陽熱利用の大發明は米人によつて一歩を進め、日本人によつて完成されました。そのお蔭で吾々は大變な恩惠を彼の空想から受けてゐます」

「吾々の時代には石炭の壽命が略わかつて、石油問題が各國の死命を制する大問題となつてゐまし

たが、既に太陽熱の時代が來たのですか」

「燃料問題は既に解決されたといつていゝでせう。まあ東京へお出になつて、太陽熱がどんな風に貯藏されて、何ういふ風に利用されてゐるかを御覽なさい。實にいゝ工合に出來てゐますよ」

「それを見ることは大變な學問です、所で先刻お話のやうに、西洋には科學者以外にもユートピアンが澤山ありましたが、日本には私の時代まではそんな偉大な空想家は無かつたやうですが……」

老人は微笑を含んで、

「それは飛んだ思ひ違ひをしてゐられます。私の知つてゐる限りでは賴山陽があります。あの日本外史は王政復古の豫言書です。言論の不自由なあの時代に、政府の忌諱に觸れることなしに、過去を說いて未來を暗示した腕前は實に素晴らしいユートピアンぢやありませんか」

「成るほど、さういふ意味からいへば御尤もです、その理想が實現されたといふことは實に愉快なことですね」

「無論、吾々はそれが爲に現在を輕んずることはないのです、たゞ人間が本統に完成されるまでは、人類の凡ての希望は未來にかゝつてゐるのですから、理想鄕の到來を早める爲に努力するのです」

「では未來倶樂部はどういふ仕事をするのです」

「各方面の專門家が、各々の立場から研究した未來觀を發表して、將來斯うなるべきである、或は斯うすべきであるといふことは、途中の下らぬ階段を拔きにして一日も早く實現されるやうに努力するのです」

未來談に夜の更けるのも知らなかつたが、優しい音樂が二十三時を報じたので、明日の東京行を樂しみに老人と美代子に「おやすみ」を言つて、寢室に引取つた。

19 東京へ

いよ〳〵東京へ行く日が來た。半生の戰場であり、第二の故鄕であり、愛着の都であつた東京。親愛なる骨肉と、許し合つた友達と、熱情を捧げた愛人とが、曾て樂しく生きてゐた東京。そして恐らくは彼等の凡てが、そこに骨を埋めたらうと想像される東京を、百年を隔てゝ見るといふことは何といふ感慨であらう。自分の胸には過去の追懷と、新世界に對する好奇心とが、風にうたれる浪のやうに揉みあつてゐた。

「では九時十分の乘合で東京へ御案内して、夜の會合まで、東京の大體を見て歩きませう」

老人は食後の莫をふかしながら私にいつた。

「非常な樂しみです。隨分東京は變つたことでせうから、懷しい昔の面影が偲ばれるかどうかゞ氣づかはれます」

「昔の面影は、恐らく殘つてはをりますまい。たつた一個所變らない場所がありますが、今お話しては興味がありませんからお預かりして置きませう」

「人口はどの位あります」

「一千二百萬人です」

「そりや大變なものですね、昔の倫敦や紐育でもその半分位しか人口がありませんでしたが……」

「倫敦や紐育でも今日の東京には及びません、それは人口ばかりでなく、都會として凡ての設備が模範的に出來てゐるからです。世界の都市を語らうと思へば先づ東京を見なければならない、とは今日世界に於ける標語となつてゐます」

私は老人が法螺を吹いてゐるのではないかと思つた。

「私の時代には東京は文明國の都市として百年は遲れてゐるといはれましたが、それがこの百年間

に何うしてそんなに進歩したのでせう」

「その後れてゐたことが、都市計畫の上に非常に仕合だつたのです、世界の諸都市が失敗した歴史を繰り返へさずに、最も進歩した計畫を自由に大膽に、全く新規に行ふことが出來たからです。兎に角今の社會の狀態を組織的に了解される爲には東京の實際をお目に掛けて、その上で凡ゆる方面の說明をするのが一番近道です……」

斯ういつて老人は起ち上つたが美代子に、

「お前も一緒に行かないか」

と誘つた。

「私約束がありますのよ、そら山川のをばさんの所へ今日十五時から伺はなければならないんです」

美代子は如何にも殘念さうにいつて、私の顏をちらと見た。

「さうだつたか、ぢや今夜は山川の家へ泊るんだつたな。吾々も都合によると東京へ泊るかも知れん」

二人は美代子に送られて玄關を出た。さうして數分の後には既に乘合飛行機の客となつてゐた。

すばらしく大きい、ゆつくりとしたものである。設備の好い汽船にでも乘つてゐるやうに三階造りで千人位の人間は樂々と腰掛けられる。食堂があり球場があり、理髮、入浴、運動等の自由なことも殆んど汽船のやうである。

僅かに十分にして偉大なる都會が下界に現れた。巨人のやうな高層建築が層々として重なり合ふ間を、一目十里にも互るやうな綠の並木路が直線を描いて、縱橫無數に通じてゐる。何んといふ雄大な都會であらう……、これが東京であると說明された時に、自分の胸は感激に燃えて、熱い涙が點々と頰を下るを覺えた。（或日の夢その一をはり）

附記或日の夢續篇は「百年後の日本」と題して雜誌「現代」に連載したが今は之を割愛する。

掃除哲學

上

緣側の隅に密柑の皮が落ちてゐる。指先でつまんで庭の隅へポンと投げる。誰でも一寸やりさうなことだ。若し斯ういふ所を彼に見付けられると、大變なことになる。「庭も邸のうちである。甲の場所から乙の場所へ、塵の位置を移動させて、それが何になる。……凡そ掃除とは……」で彼一流の掃除哲學の講義が始まる。彼とは、今は故人になつた佐治實然氏である。彼は得意の掃除哲學で多くの訪問者を惱（？）ました。しかし自らは之を實行して掃除の範を天下に示す積りでゐた。

彼の麻布の住宅は純日本式の建築であつたが、私がいまこゝに說かうとするのは、文化住宅や西洋建築や日本住宅に關する掃除のことである。

罪人を多く作つて敎誨に骨を折るよりも、初めから罪人を作らないことが望ましいやうに、塵を多く作つて、掃除を頻繁にするよりも、初めから掃除に手數のかゝらない家を造る方がよい。

在來の日本住宅は全く開放的で外來の埃を歡迎するやうに出來てゐる。少しく風の吹く日なぞは

一日に何度掃除しても、後から後から、「外來」がやつて來る。

はたきと箒が持ち出される。一旦室内に安定したほこりを再び叩き立てゝ、これを空中に飛散せしめ、それを箒の先で室外に逐ひ出さうとする。そこに空氣對箒の激しい鬪爭が開始される。多くの場合——冬期に於ては例外なしに——外の空氣は疊を這つて刄の如く鋭く吹きこんで來る。埃は逆に室内に押流される。箒はそれを押返す。板ばさみになつた塵はパッと身をかはして立ち上ると見る間に、濛々たる渦を卷いて室内に遍蔓する。

逆流に棹さす者のやうな空しき努力が、昔から何百年の間繼續され、大正十四年の今日、小學校の物理で教へられる空氣の性質やその動き方は、女學校出の奥さんにさへ無視されてゐる。しかも日本住宅の掃除法なるものは概ねこの類である。これに比べれば四角座敷を丸く掃く居候の方がまだしも要領がいゝ。

掃除の對象物となる塵埃は、一體どうして出るか、外から來るものと、内から來るものとの二つに大別される。外から來るものは家屋の建築の仕方によつて、防ぐことが出來る。アメリカには開かずの窓を持つた小學校もある。窓は採光のためのみで、音樂を遮り、外部の埃を避ける爲に初めから開かぬやうに出來てゐる。勿論それには換氣裝置もあり、吸入掃除器も設備してある。日本の

住宅でも、これを西洋風に建築し、またこの頃流行の文化住宅風にするならば外來の塵は大部分これを防ぐことができる。

然らば内から出る塵は如何にしてこれを防ぐか。それを防ぐ事は不可能といつてよい。が内から發生する塵にも幾通りかある。第一には蒲團の出し入れによつて生ずるもの、第二は着物の摩擦によつて出來るもの、第三は疊や敷物の少しづつ擦切れて出るもの、第五は竿縁天井の隙間から落ちて來るもの、第六は仕事や食事や子供の遊戯などによつて出る塵である。尙數ふれば際限がなからうが、大體これ等六つの塵源が家の中に存在してゐることは事實だ。

だから家の中に出る塵は我々の住と衣とが消耗されて行くレコードであり、價値低減のバロメーターである。毎日出る塵の分量を一定の標準によつて量ることが出來、その塵に價するだけの金を貯蓄して置けば、衣と住との原價償却が完全に行はれる譯である。

中

文化住宅に住みながら、その掃除の方法を數百年依然たる「掃出し式」によらうと試みて日々失敗を繰返してゐる家庭は可なり多いやうだ。戸障子が少く、家の外廓が西洋風の窓になつてゐる家で

は、掃除の時にほこりの拔けが惡くて困るであらう。

洋風の家は矢張り洋風の掃除法によるのが合理的である。洋式掃除法は一口にいへば、安定してゐる塵の位置を、成るべく動かさぬやうにして、そのまゝ形附けるやり方である。

絨氈の塵は取り惡い。これを日本の柔かい箒でセ、クつても、ほこりが立つばかりである。アメリカ出來の剛い箒を使ふと樂に掃ける。それよりもいゝのはカーペット・スキーバーである。箱の中央部にブラシが付いてゐて、その兩わきが塵取になつてゐる。その箱にはゴムの車と、長い柄が付いてゐる。これで敷物の上をガラ〳〵やると割合にほこりが立たずに塵は箱の內に納まつて了ふ。それよりも一層いゝのは吸込掃除器である。電氣によつて眞空を作り掃き乍ら袋の中へ塵を吸ひ取るものである。これ等の掃除器は外國では可なり古いもので、日本でも賣つてゐるが、しかし使つてゐる家庭は比較的尠い。掃除の要諦は塵をその位置から動かすことなしに形附けるに在る。それが衞生的でもあり、合理的でもある。故に日本住宅にも之を使ふことは望ましいことで、衞生上の見地から考へても決して贅澤ではない。

凡ての仕事の仕方が西洋と日本とは反對なことが多いやうに、掃除に於ても彼我前後してゐることがある。先づはたきを掛けて後掃く我の掃除に對して、彼のは先づ掃いて後はたきを掛ける。そ

のはたきも日本のは文字通り、はたき立てるのだが、西洋のは羽ばたきで輕く撫でるのである。拭掃除も、毎日ぬれ雜巾を掛ける日本のに反して西洋のは空拭である。これは勿論家の構造、材料等の關係もあるが、少くとも西洋風の家では洋風掃除に從ふ方が凡てが都合よく行く。

室內を淸潔に保つ爲に、塵の目立つやうにするのは衞生上からよいことではあるが、これも程度ものである。私は客間に藍無地の支那絨氈を敷いて見たが、目塵が立つて一日に何度でも掃かなければならないのに閉口した。これが模樣物なら一日や二日掃かなくても少し位の塵は目立たずに濟む。

便所を明るくして、白タイルを腰と床に張つて見た。光澤のあるタイルを使つた爲に、床のほこりが目立つて我慢が出來ず一日數回掃除を餘儀なくされたことがある。恰度鏡の上へ物を置いたやうに一ッの塵が二ッ宛に見える——まさかそれ程明かでもないが——紙の粉と和服の裳から散るほこりとが水蒸氣で濕氣を持つたタイルの上にへばり附いて、掃いても取れず、空ぶきでもいけず、結局一々雜巾掛をしなければならぬ。板敷にすればこんなことはない。しかし見えないからといつて、塵の有ることに變りはないのだ。して見るとこれは公娼と私娼とに比すべきものかも知れない。

和服が如何に多くのほこりを便所内に落すかは、このタイルでよく分つた。吾々のやうに木綿物を多く使つてゐれば塵の產出高は最も多い。絹物や麻布なら塵の出方も從つて尠い。自然金持はいろいろの點に於て得をするものだといふことを考へさせられる。

下

塵源が多ければ多いだけ、掃除に手が掛る。これを西洋と比較すると日本の方が遙に塵源が多い。洋服よりも和服、西洋紙よりも日本紙、ガラスよりも障子、板戸よりも唐紙、西洋壁よりも日本壁の方が塵は多く出る。寢室にしてもベッドと蒲團とを比較すれば塵の發生が後者に多いことは明かだ。だから西洋住宅に於ては日本住宅のやうに塵が出ない。外來の塵も尠い。從つて掃除が割合にうまく行く。たゞ一つの例外は、西洋住宅は靴のまゝで上るから外部の土砂を家の中に持ち込むことである。嘸敷物や床が泥だらけになるだらうと想像するのは東京市の內外に住む人だけのことだ。美しく洗ひ清められた道路を持つ文明國では、靴の裏を探しても泥や砂を探し出すことは六ケ敷い。それでも靴を脫いで上る日本住宅に比すれば幾分の塵源をなすことは確だ。

掃除とは勿論、平面的に床を掃き清めることのみではない。立體的に戶障子等も清掃するものであるが、日本住宅に硝子が用ひられて久しいに拘らず、硝子磨きが割合に閑却されてゐる。どの家へ行つて見ても、完全に拭き清められた硝子を未だ曾て見たことがない。——私が貧乏人の家ばかり見てゐるせいかも知れないが——。第一硝子が下等品である。甚だしいのになると、隣の家が未來派の建築に見えたり、謹嚴な人の顏が漫畫のやうに見えたりする。デコボコ硝子では磨いても磨き榮えはせぬだらうが、それにしても透明であるべき硝子が所々まだらの半透明と來ては、何の爲の硝子ぞやといひたくなる。

それもその筈、日本では硝子磨は一月に一度か甚だしいのになると一年に二三度しか磨かない。西洋人のやうに一週一度必ず磨き清めるといふやうなことは思ひも及ばぬことであるらしい。日本ではまだ硝子の趣味を本統に味ふことを知らないのだ。

冬になるとストーブを焚く、湯氣を盛んに立てる。この水蒸氣が室中のほこりを押へつけて、硝子に行き當つて露となる。その露が乾いて了ふと、水蒸氣が抱擁して吳れたほこりや煙が水に溶解されて硝子の表面を色づけてゐる。殆ど毎日のやうに清拭しなければ氣持のいゝ硝子の美を味ふことは出來ないのだ。

塵を處置するに四つの方法がある。掃き出すもの、叩き出すもの、掃き取るもの、拭きとるもの。

而して拭きとる方法に乾拭に濕拭の二方法がある。前者は清拭又は空拭で、後者は雜巾掛である。木材を生地のまゝで多く使ふ日本では雜巾掛が多く、塗つて多く使ふ西洋には空拭が多い。

要するに塵は屋內の危險分子である。彼等はその場で檢束する必要がある。これを高飛させてしまつては移動警察と雖も手のつけやうがない。

吾々は塵に對しては絕對的に壓制であつていゝ。思想に無理解な政府が「共產」とか「社會」とかいふ文字を極端に恐れ、それに壓迫を加へるやうに、吾々は塵を見たら「共產」以上の危險物と見做し、證據の有無に拘らず檢束すべきである。

然るに在來の日本住宅の掃除法は、餘りに文明的（？）で、先づ彼等を解放する。眠れる彼等をはたきや箒で叩き起し警告を與へ、盛んに空中に飛躍させる。屋外との交通を自由にして、頻繁に往復させる。「外來」が新黴菌を持つて入つて來る。

これに對して西洋住宅は頗る鎖國的である。殆ど開港地らしい窓もない。さうして室內にできた塵は現場に於て靜かに之を檢束し、處置する。

「掃除哲學」の要領は實にこゝにある。（一四・一・一七）

サラ・ベルナールが取持つた緣

1

日曜日だけに町はいつもより靜かだつたが、サラ・ベルナールの出るオーフキアム劇場の前は群衆が渦を卷いてゐた。

それは今から一昔前のこと、オーフキアム巡廻劇場は當事米國内二十四箇所に同じ名の劇場を持ち同じ藝題で各地を巡業する一流のヴオードヴイルであつた。

このオーフキアム・サーキットと特約が成つて名優サラ・ベルナールが得意の「椿姫」の一幕物を演ずるといふことを知つた私は、早くから日曜日のマチネーに一席をリザーヴして置いたのであつた。

演劇の民衆化とでもいはふか、ヴオードヴイルが時々世界的名優を加へて、驚くほど安い料金で名優のアクトの片鱗だけでも見せて呉れるのは實に有難いことである。

「デイヴアイン・サラ」それは世界が彼女に捧げた敬稱である。サラほどの名優を假りに日本の舞臺で見るとしたら、恐らく三十圓、五十圓の入場料は拂はねばなるまい。それが僅か夜間十五仙から七十五仙の四種、晝は十五仙から五十仙の三種の入場料で見られるのであつた。十五仙でベルナールを見る。五十仙出せば最上の席でそれが見られた。夢のやうな話だが事實である。

僅か十分前まで、殆どがら空の劇場は、定刻の二時十五分には滿員の人いきれで蒸されてゐた。いつもの通り私は少し早目に出掛けて開幕を待つ間、それとなく米人の風俗や習慣に注意することを樂しみにしてゐた。

ふと氣がつくと、私の右隣の席に鼻が三角定規のやうに薄く尖つた痩ぎすな中年の一米人が私の顏をシゲ〳〵と見て、何か話しかけたさうな風である。斯うしたことは劇場などでは一向に珍らしくもない。そのうちに「君は支那人か」とか「日本の軍人ではないか」位な愚問が出るだらうと思つて、平氣で濟ましてゐた。

オヴアチュアーが始まつて、石綿製の防火幕が揚がると、下から俗な廣告幕が出る。いつも私はこの廣告幕に反感を持ちながら、矢張それを讀むのであつたが、ふと隣席の米人を見ると、彼もまたこちらを向いてニツコリ笑つた。彼はこの機會を逃すまいとするやうに、私の方へ少し身體をすりよせて、「カナザワ」と囁いた。

私は全く面喰つた。彼は「この意味が解るか」と追窮する。小學校の地理の試驗にでも出會した氣持で自分は金澤と云ふのは北國の或都會の名で、人の姓にもある旨を答へると、今度は先方がやゝ面喰つた形で、それは「グツト・アフターヌーン」の意味ではないかと反問する。「それはコンニ

チワである」、「オ、、コンニチワ、コンニチワ、さう〳〵私はカナザワと間違へた」といつたので、二人は腹を抱へてソツと笑つた。

次に彼は「いゝものを見せて上げよう」といひながらポケツトから手帖を出し、その間にはさんである西洋封筒の中から二三枚の寫眞を引出した。

「私はさき頃日本へ行つて、つい二三日前に歸つて來た。大變いゝ國です。これはキヨトで、これはヨコハマで寫したのです」といつて說明する寫眞を見ると、神社の鳥居を背景に子守が赤ん坊をおんぶしてゐるのや、彼の友人が長い脛を「リキシヤ」の上に曲げて笑つてゐるのや、さうした種類のものであつた。私は苦笑を禁じ得なかつた。たゞ話のうちに、通り一遍の米國人の日本觀とは著るしく違つたところが、ちよいちよいあるので、話しは少しくはづみかけたが、幕が開いたので惜くも中絕した。

幕合のないヴオードヴイルのプログラムは一回二十分位づつで次々に替つて行つた。「椿姫」は第五番目になつてゐた。サラはその時七十の高齡だと多くの新聞に報ぜられたが、「年なんかどうでもよい、でも七十までには二三年間がある」と訪問の新聞記者に微笑んで語つた。新聞は彼女の逸話を擧つて紹介した。彼女がわざ〳〵一流の劇場を打つて巡らずに、ヴオードヴイルに出たといふこ

とは彼女を米國人の間に一層ポピュラーなものにした。新聞にはベルナールの名の次に括弧をつけて（バーナード）といふ米國流の發音を示したのもあつた。

世界的名優といふ尊敬と、ヴオードヴィルに出たといふ親しみの念から全米國の人氣はもとよりのこと、當日の見物人は寧ろ異常な興奮をさへ交へて彼女を見るために集まつてゐた。

四番目の幕が下りると見物は一時ザワ付いたが、すぐに「椿姫」の舞臺があくと水を打つたやうに靜まりかへつた。

2

場面は椿姫のマルゲリツトと情人アルマンの同棲の家で、アルマンが外出した後へアルマンの父親が來て、マルゲリツトにアルマンを思ひ切らせようとする。科白は總てフランス語で私には解らなかつたが、それでも今どういふ科白をいつてゐるところであるかは、ほゞ想像された。

彼女は眞底からアルマンを愛してゐた。世間の眼からは妾や圍ひ者のやうに見られた彼女の胸の底にも純眞の愛がひそんでゐた。彼女はアルマンを愛するの餘り彼の父と會見する機會を造るために、この日アルマンを無理やりにパリに出掛させた。昔氣質のアルマンの父と、その父から賣女のやうにさげすまれてゐたマルゲリツトとの會見に於て、威壓的の父の態度が段々に變つて來た。

「アルマンに對する私の愛が決して慾得づくでない事を信じて下さいますか……この戀を一生の望みとも樂みともしてゐたことを信じて下さいませうか……」

アルマンの父親はこれを認めた。「ではあなたの娘さん達になさるやうに私を抱いて下さい、さうして私に純潔なキツスをして下さい……」。

斯うして彼女はたうとうのつぴきならずもアルマンとの戀を破滅に導いてしまつた。所謂義理ではない。たゞ眞にアルマンを戀するが爲めの懊惱を小さき胸に祕めて、彼女はN伯爵に身をまかせる手紙を「お子樣の仕合せの爲めに」アルマンの父親に託した。

父親を送り出した彼女は氣も狂はんばかりに泣き叫んだ。それが幕切れの瞬間である。エモーショナルな大きいゼスチユアー、驚くべく大きな音聲、悲痛な顏の表情、偉大なる體軀、若いマルゲリツトとしては少し老け過ぎては見えたが、其藝の若々しさ、凡てが舞臺の外に溢れ出る程の大きさであつた。その偉大な彼女の顏と姿と、聲と藝とは今もありゝと私の頭の中に刻み込れてゐる。

それからは取立てゝ見るほどのものもなかつたが、可笑しかつたり、感心したりする場合に、隣席の米人と顏を見合せて同感の意を表し合つた。彼は歸り際に名刺を呉れた。

「ベーティー、アンド、ホフマン」とオールド、イングリシュで印刷され、その下に小間印刷業とやゝ小さい字で記してある。

「あなたも印刷業者ですか、私も日本字の新聞と印刷業とを兼てゐます」私の出した名刺を見て彼は驚いた。

「オヤ私も以前は田舍で新聞を發行してゐたことがあります。今は印刷だけですが是非一度訪ねて下さい。私もあなたのオフィースをお尋ねしますから」

その日はそれで別れてしまつた。私もつい忙しい爲めにベーティーの印刷所を訪問する機會がなく、忘れるともなしに忘れてしまつてゐた。

3

ところがその時から凡そ一週間も經つたと思ふころ、ベーティー君は私の新聞社を訪ねて來た。私は彼に先手を打たれたのであつた。

彼は先づ日本の活字を見たいと望んだ。誰でも經驗することだが、西洋人に日本の活字の説明をするほど小うるさいことはない。このやうな小新聞社にも活字の數が三十萬本あると聞いて、彼が

これを信じ得なかつたのも無理はない。それで尙且毎日何かしら足りない字があるといふやうな説明は、初めての彼には殆ど諒解の範圍外に屬してゐた。アルファベット二十六字で、辯じ得ざることなき國に生れた彼がまづ活字の説明——といふよりは寧ろ日本文字——日本文字と云ふよりは寧ろ漢字の説明——を容易に呑み込み得なかつたのは、あながち私の會話がまづいためばかりではなかつたのである。

百聞は一見に如かずである、兎も角工場を見て下さい。私はかういつて、ベーティー君を活版工場へ案内した。彼は先づ立體的に排列された活字のケースの多いのに驚いた。さうして文選工がその間を驅けまはつて右から、左から、上から、下から、さうして或時は五歩も十歩も動きまはつて一本一本の活字を拾ひ出す早業を見て驚いた。一體この活字はどういふ順序に排列されてあるのか……斯ういふ質問に出會すと勢ひ康熙字典の説明から初めねばならぬ。

彼は文選から植字、大組まで見て、更に解版と復字を見て、其の手續の複雜なのに一驚を喫した。彼は「これが英文なら」と前置して文選と植字が一人の手で同時に出來ること、解版と復字がまた一人の手で同時に出來ることを説明し、更に百も承知のリノタイプの講釋までした。

その後自分も彼の印刷所を訪づれて、工場の實際を見せて貰ひ、またその子供たちにも紹介され

て段々心易くなると、今度は彼の家庭との交際が始まつた。

4

彼の家の客間には日本からの土産物がいろ〳〵列べられてあつた。それ等の品物は日本人たる自分に多少の懐し味を覺えさせるものであつたが、別に珍らしいと思ふ物もなかつた。たゞ格段の興味を惹いたのは、一方のテーブルに「東京パック」が堆く積まれてあることであつた。

ベーティー君は机上の「東京パック」を手に取つて、『赤裸々の日本を知るにはこれに限ります。御覽なさい、他の新聞雜誌に書いてない日本の有樣がこれで裏面まで解るではありませんか。』彼は斯ういつて、最近着の一册を擴げて見せるのであつた。

それは勿論僞らざる日本の實情を描き出したものには相違ないが、中には可成り下品なもの、例へば立小便をしてゐる所とか、婦人が湯文字一つで洗濯をしてゐるといつたやうなものを見せられると、少しくきまりが惡かつた。そして英文の說明で解り兼ねるものに就ては一層精しい說明を求められるのであつた。彼は機會さへあれば日本を訪問したときの見聞や實驗を喜んで話した。普通の西洋人なら無論ホテルに泊るところを、彼は橫濱の「ホラヤ」といふ日本旅館に泊つたといふ。

法螺屋といふのが如何にも妙なので、ローマ字に書かせて見ると、それは蓬萊屋であつたが、發音の具合でホラヤと聽えるのであつた。

橫濱に泊つて東京を見物した彼は、しるこやに飛び込んだり、そばやに入つたりして、日本人らしく振舞ふことを心掛けた。時にはやき芋の二三錢を買つて、それを米國流に立喰ひしながら、畫めしの代用にしたといふ。一山二錢とか三錢とかいふ立札の文字も手帳に寫しとめて記憶に努めた結果、正札の文字位は讀めるやうになつて、買物をするに便利になつて來たといふ。

それから彼は日光を見ずに、京都に行つて、そこで尾崎行輝君と相知つた。「東京パック」は同君の好意で送つて貰つてゐるといつた。『日光を見ずんば結構を語るべからずといふ諺が日本にある。何故に日光を見なかつたか』といふ私の問に對して『自分は日本人の「生活」を知りたかつた。古い藝術はどうでもよい』と答へた。然らば日本に於て一番君の興味を惹いたものは何かと重ねて問ふと、彼は極めて無雜作に『ピープル』と答へた。

彼の觀察は慥かに普通の米人を拔いてゐた。彼は一つのプリンシプルをもつて日本を見、日本人の生活を見たのであつた。

5

彼の日本好きは、殆んど病的といつてもよいほど深入をしてゐた。或時彼は私を案内して彼の二男バイロンが出てゐる小學校を見せて呉れた。その小學校の建築は最新式で廊下を掃除するには眞空掃除器を使つてゐた。校長が之を實驗して見せて、さて自慢していふやう、『この通り塵は少しも立たずに掃除されて全く衞生的である』といふと、ベーティー君は私に向つて、日本の學校はどうかと尋ねた。

『日本の學校では上草履といふものを履くから、第一土砂を屋内に持ち込むことがない。それに毎日雑巾掛けをするから、床はこんなにざらくしてゐない、殆ど鏡のやうに光つて居る。』多少の負け惜しみも手傳つて私は斯う答へた。

ベーティー君は待つてゐましたとばかり、會心の笑をうかべて、校長の方に向き直つた。

『日本人はマットの上に坐るといふ。それはマットではない。タ、ミといふ柔かい敷物で、その清潔なこと世界にその比を見ない。その上にザブトンといふ美しいクッションを布いて坐るのだから靴のまゝで室内を蹂躙する米人とは比べものにならない。』

ベーティー君はいつも斯ういつて日本人の潔癖を吹聽するのであつたが、今私が日本の學校の清潔なことを校長に話すと、我意を得たとばかりに勇み立つた。『さうです、その上草履は私も知つてゐます。一體學校の中へ靴を穿いて上るといふのが、よろしくない。どうです校長、あなたの學校では、一つ他に卒先して靴を脱がせ、上草履をお用ひになつては』。

これには日本人たる私でさへも少々面喰つた。ベーティー君の態度が頗る眞面目で、寧ろ嚴肅といつてもよいほどであつたので、校長はひどく面喰つてしまつた。しかし斯うした突飛な提案を生眞面目にするところにベーティー君の面目が躍つてゐた。

6

彼は日本人の悪口をいふ米人に出會すと、急に嚴肅な、襟を正すといつたやうな態度になつて、先づ第一に斯う質問する。『あなたは日本へお出でになつたことがありますか』。

ところが多くの場合、日本の悪口をいふやうな米人は、日本を見るどころか、日本の所在さへ的確に知らない連中が多いのだから一たまりもない。

『日本を見ないで、日本を知ることは出來ない。僕は最近日本へ行つて來た』。日本人が洋行をしたといふよりもエライ權幕で、得意の説教を始めるのであつた。

俗に日本びいきといはれる米國人がある。日本人の事といふと一生懸命に世話をする。「在米同胞

の恩人」といふやうな人は可なり多い。それ等の人々の中には眞底から尊敬に値する人達もあるがしかし「日本びいき」必ずしも悉く眞に日本人の爲に計るとばかりはいはれない。

排日案が出れば、必ず眞先に反對の決議をする者は米國各地の商業會議所の連中である。有難いことではあるが、彼等から日米貿易の利益を引去つても、尙且悉く「日本びいき」であり得るや否や、殊に政治運動に携はるに及んで、手の裏をかへして排日を叫ぶものが絶無といはれやうか。

ベーティー君の如きは、何等の利益をも日本人から得てゐなかつた。若し强ひて利益らしいものを探したら三井物産の出張所から英文の印刷物の註文を僅かばかり受けてゐた位のものであらう。その時分物産にゐた千田牟婁太郎君や、河津益雄君等と親しくした外に、殆んど一般の日本人社會とさへも沒交渉に、たゞ日本の爲めに辯じてゐた。

彼はその周圍の空氣を日本人によいものにした。私は彼の爲めに普通日本人の入り得ない多くの團體や、社交界に紹介されて、どの位便宜を得たか判らない。彼は本統の意味での日本の理解者であつた。それは彼が日本好きの爲めであつて、所謂「ひいき」の爲ではなかつた。惜しいかな彼はその次の冬ふとした風邪から肺炎を起して死んでしまつた。

十年の歳月は流れた。そしてベーティーを私に引合はした名優サラ・ベルナールが今度は永遠に「人生」の舞臺を引退した。（一二・四・一三）

ねずみ

「今夜こそ屹度かゝるよ」

「でも度々失敗してゐますから、どうですか、大變な新案ですネ、ホ、、」

妻は自分の新案なるものゝ成功を疑つてゐた。

「さう早く網を上げて仕舞つちや、仕方がない、鼠と人間の智恵競べさ」

「でも、事によると、鼠の方が利口かも知れませんよ」

一

妻は何處までも自分の計畫に大した信用を措いてゐないらしかつた。それも強ち無理ではなかつた。鼠捕りの方法に就ては、これまで可なりの經驗を持つた自分ではあつたが、此頃の鼠はどうも自分の思ふ壺にはまらない。謂はゞ愚弄され通しにこの半年といふものを、苦しめられてゐた。猫いらずといふやうな毒藥を使ふことは殺し方として一番手取早くもあり慈悲のある死刑の執行には相違ないが、どうも自分はこれを使ふ氣になれなかつた。唯つた一度試しては見たが、ア氣持の惡い燐の臭ひは、あとから考へても胸が惡くなる。それに遺り方が下手なせいか、どうも鼠が喰はな

い。萬一パンの屑などに塗つたこの恐るべき毒藥がどうかした間違で、子供の口にでも入つたら……現に家には這ひ廻はつて、手當り次第に口の中へ物を拾ひ込む時代の子供がゐるのである……そんなことを考へると、斯うした藥を家に置くことが何だか危險に感じられて來た。それのみではない、友人の話によると、或る夏、彼の家の天井から蛆がボタ〳〵落ちて來た、そして異樣な臭氣が鼻を衝くので、調べて見ると猫いらずで殺してミイラになつてゐる筈の鼠が腐つてゐたのだと知れた。斯ういふ話を聞いてからは、一層忌氣がさして藥はとう〳〵捨てゝしまつた。

二

猫を飼はうかとも思つたが、猫好きなのは自分一人で、家族のものは餘り賛成しない。金網で出來た捕鼠器もいゝが、生擒つた後の始末が面倒だ。一番手輕なのは板の上にバネ付の針金のあるものだが、これは取扱ひが危險な上に首を絞められて目玉が飛び出した死樣が氣に喰はぬ。いろ〳〵の六ケしい條件があるので自分はとう〳〵亞米利加あたりの雜誌で見たやうに記憶してゐる一種の新案を試みることになつた。

裏の物置から醬油樽の古いのを持出して來てガタガタになつた箍を締めて水を七分通り入れた。その上に厚い洋紙を被せて、廻りを紐で堅く縛つた。洋紙は樽の蓋のやうにピンと引張つてゐる。剃刀を持つて來てこの紙の蓋の眞中を十文字に切つた。紙は厚いから垂れ下がるやうなことはない。鼠をこの上に誘つて、醬油樽の陷し穽に水葬しやうといふ工風である。餌として胡麻だの、パン屑だの、煎餅の斷片だの、さうした目方の輕いものを紙の上に載せた。

「今夜こそ思ひ知らして吳れるぞ、……早く燈火を消して寢て仕舞はう」

三

燈火が消えたか、消えぬ間に、鼠はもう臺所でガタ〳〵やつてゐる。床に入つたが、臺所の方の物音が氣になつて眠れない。天井裏をガサ〳〵と氣持の惡い音を立てゝ二三匹の鼠が荒れ廻つてゐる。

「畜生！」

毎晩のことではあるが、毎晩だけ愈々以て忌々しい。天井の鼠が荒れる度に、自分は日本家屋の不完全を呪ふ。何處からでも鼠が自由自在に侵入し得る家を建てゝ、永い間平氣で住んで來た祖先の忍耐力の强さにも驚くが、これを改良しようともしない現代の日本人にも愛想が盡きる。迷信の

人々になると、天井裏に鼠がゐないと火事があるといつて、寧ろ彼等を歡迎する。鼠の本能からは、さうしたことも有り得るだらうが、それにしても何とした馬鹿げた事だと腹が立つ。或る人は新築の家の天井裏に銅線を引廻して、鼠がこれに觸れると恐ろしい響がするやうに設計したといふことを聞いて羨ましく思つた。若しこれが借家でないならば、自分は今晩只今でも天井板を引ぺがしてその裝置をすることを吝まぬだらうに。

四

そんな事を考へてゐると、天井裏の音響はいよ〳〵激しくなる。ゴーッ〳〵といつて何やら引摺るやうな音が聞える。不思議に思つて頭をもたげて聞くと、音は正しく隣の茶の間の天井である。自分は思はず失笑を禁じ得なかつた。それは先日自分が天井裏の鼠除けの積りで長さ三間などの鐵條網を買つて來て、天井裏に入れて置いたことを思ひ出したからである。その鐵條網に引掛つて、それを引摺りながら苦しんでゐるのだと思ふと、もう彼等は今夜限り再び天井には入らぬだらうと思つて會心の笑を漏らしたのであつた。所がこれは自分の見當違ひであることが後に至つて判つた……といふのは鼠はその後も毎晩やつて來て、鐵條網を引廻はして面白がつて遊んでゐるのであ

る。何といふ馬鹿げた事だ、鼠の爲に態々一種の運動器具を拵へてやつて喜んでゐたとは……。

さうだ天井裏は彼等の爲に絶好の遊び場所だ。そこには食物はない。けれども彼等に取つては日比谷公園の運動場位な感じはあらう。そこには何の障礙物もなく、何の危險もない。遊び場に困つて、自動車や電車や自轉車の通路に遊ぶを餘儀なくされてゐる人間の子供に比して何たる幸福な奴等だらう。斯うした樂園を彼等の爲に供へて置いて呉れる人間は何といふ慈善家だらう。

食事と、製糞と、遊戯と、生殖と、睡眠と、そして物を嚙ぢることが彼等の生活の全部のやうに見える。御粗末な貸家の天井板は浪のやうなうねりを持つて、板と板との繼目が合はぬほどの「曲線美」を示してゐる。花を催し、また花を散らす風もこの天井裏を見舞つて呉れる。折々、笊の底から豆が漏るやうな勢ひで天井裏から砂とほこりと鼠の糞を蒔き散らす。大粒小粒取混ぜて疊の上に落花糞々、若しその一粒だに掃き殘せば、可愛らしい指先が逸早くこれを口中に運び込む。

五

とりとめもない考のうちに、いつか眠に落ちて行つたと見えて、臺所に聞える異樣の物音に夢を破られた。ボチヤ〳〵といふ小刻みな水音は正しく鼠の一匹が、まんまと罠に掛つたことを語つて

るる。

「オイ捕れたぞ！」

餘りに聲が大きかつたので、妻は子供の目を醒ますまいとして懸命に乳房を含ましてゐる。

水音は二三分にして已んだ。まだ外に二三匹ゐると見えて、相變らずガタ〳〵やつてゐる。燈火を點けて行つて見ると、蓋の紙はもとのまゝである。さてはさうではなかつたかと、紙の一方を持ち上げて見ると、人間ならば十二三歳のいたづら盛りといつた恰好の奴が、目出度く大往生を遂げてゐる。

「オイ本統に捕れたよ」

思はず大聲になるのを途中で嚙み殺して、また紙の上へ餌を撒いて床に入る。一寸愉快で眠れない。うつ〳〵としてゐると、ボチヤン！　といふ音に續いて小刻みの水音がまた二三分、あとは靜寂、

「また罹つたよ」

今度は小さい聲で、妻にさゝやいたが、前後不覺で眠つてゐる。自分は獨り北叟笑んだ。

六

翌朝妻が枕元に來て三匹罹つてゐるといふ報告をして呉れた。これで先づ全滅だらう。これからは枕を高くして眠れる。と思つたのは誤り、その翌晩もまだ出る。今度はどうしても醬油樽では駄目になつた。毎晩、毎晩、可なり面倒な手數を掛けて、あらゆる食物で誘惑を試みたが、どうしてもいけない。こつちが根氣負けがして、何とか外の手段を取らなければならなかつた。

それも臺所ばかりを荒らすのなら別に困りもしないが、障子を喰破つて女中のゐない女中部屋を荒らし、またその境の障子を破つて茶の間を荒れ廻り、更に進んで二三ヶ所の障子を破つて、二階に驅け上り、玄關にまでいたづらに出掛る。幸に座敷兼寢室の八疊は唐紙で仕切られてあるから唯一の完全地帶ではあるが、それは多だけのこと、夏になれば我慢にも締切つて置く譯には行かない。蚊帳は吊つて置いても、この中へ飛び込まれては一大事である。そこで唐紙を半分開けて、その間へ斷物板を横に立てたり、テーブルを持ち出したりする。これが第一の防禦線で、干物竿の短かいのを何本も蚊帳の裾に置いて第二防禦線を作る。所がこれはまた出入りに大不都合である。

七

自分がまだ下宿の二階にゐた時代のこと、下宿住ひの自分としては奮發した積りの六疊吊の麻の蚊帳を四疊半の一室に吊つて寢た晩の事である。あまりに蒸暑いので窓を開け放しで寢て仕舞つた。フト何かごそごそいふので眼を醒ますと、鼠が蚊帳の裾の所にゐるらしい。ハツト思つて起き上りさまに電氣を捻ると、鼠は蚊帳の中で逃場を失つて布團の廻りを飛び歩るいてゐる。外へ出してやらうと思つて、蚊帳の一方の裾を捲くり上げて追つて見たが、鼠はこれに恐れて反對の方に廻り、蚊帳の上を目がけて飛び上つた。落ちては飛び、飛んでは落ちてゐるうちに、蚊帳の一隅に向つて大飛躍を試みたと思ふと、そのまゝ姿を消して仕舞つた。まさか蚊帳の天井へ張り付いてゐるのではあるまいと、恐る〳〵近よつて見ると、蚊帳の隅が脹れてゐる。調べて見ると、蚊帳の天井と周圍との布を縫合はした所が袋になつてゐる。鼠はその耳の縫目の綻びから、遮二無二飛び込んだので、暫くはヂツトしてゐたが、そのうち袋の中を歩き出した。その袋になつてる中を辛うじて歩き得るほど、肥大な奴である。もうかうなれば文字通り嚢の中の鼠である。

「どうして呉れやう」

自分は思はず獨言をいつた。いまこれを一撃の下に撲り殺すのは譯はない。それでは新調の白い蚊帳を汚してしまふだらう。殺した上で取出すのも氣持が惡るい。さうかと言つて今夜一晩鼠の死骸を頭の上に吊るして寢るのは尙更氣持が善くない。一層朝までこのまゝにして置かうか、しかし夜中かうしてゐるうちには小便もするだらう。現に糞は已に二三十粒も袋の中にころがつてゐる。また若し自分が寢てしまつたら、此の蚊帳を喰ひ破るだらう。幸に外の方ならよいが、間違つて內側を喰ひ破つて、頭の上へでも飛び下りられる時の事を思ふと、このまゝ寢る譯にも行かない。イヤこのまゝではとても寢つかれるものではない。

「よし！」

遂に或る決心が自分を捕へた。鋏を持ち出して蚊帳の外から、袋の一方を切り破つた。それから鋏の先で鼠の尻を輕く突いて見た。案に相違して鼠は後しざりをしてしまふ。そこでピンを二三本持て來て鼠の尻の方の袋を縫つてしまつた。鼠の爲に背水の陣を布いてやつたのだ。

「パチン！」

電氣は消された。息を殺して待つこと二分……三分……五分……なか〳〵前進を始めない。寢床の上にひつくり返つて待つこと十二三分——この間の長かつたことよ——そろ〳〵前進してゐる樣

子だ。穴のところへ辿り付いたと見えて、暫しもがくよと覺えたが、恐ろしい音を立てゝ床の間の上へトンと落ちた。

「しめた！」

自分は思はず聲を立てゝ同時に電氣を點けた。鼠は大まご付にまご付いて室の外へ逃げ去つた。

斯んな馬鹿々々しい、苦い經驗があるので、以來蚊帳を吊ると鼠の入らぬやう細心の注意を拂ふやうになつたが、一體自分が非常な鼠嫌ひ――好きな人もあるまいが――になつたのにはまだ〳〵外に譯がある。

八

子供時代の自分はいろ〳〵の動物を捕ることゝ、これを飼育することを樂しみとした。わけて南京鼠は自分のペットとして愛育したものであつたが、その道樂（？）が嵩じて普通の鼠を飼ひ馴らして見たく思つた。それほど鼠好きであつたが、一夜鼠の爲に咽喉佛の邊を嘗められてから急に恐ろしくなり始めた。その内にペストが流行り出し、また鼠毒の事を聞いてから、段々嫌ひになつて今では不潔な非衛生な、恐ろしい動物としてこれを擊退せずには置けぬやうな氣持になつた。

人間が自分達の生活上の都合から、段々自然界を制服すると同時に、嘗て地上に生を享けた動物で、今は博物館にしか見られぬものもあるやうになつた。鼠とても生を享けて此世に存在する限りは、一種の生存權を持つてゐる筈だ。今はたゞ人間の邪魔をせぬ範圍に於てこの生存權は認められてゐる。肉を喰ふ爲の飼育、動物試驗の材料の爲の飼育はあるが、家庭のペットとして愛撫される性質は、先天的に彼等に備はつてゐない。彼等は日光を避け、人を避け、他のいろ〳〵の動物を避けて、夜陰に食を漁る。しかもその食物は極めて少量であるにも拘らず、人間は彼等を敵としてゐる。オ、小さな被造物よ人間はお前達の生命を取り得るがお前達を創造することを知らぬ。人間は殺すのみである。人間は恐らく永久に生命を造ることは出來ぬだらう。人間の智惠が益々發達してお前達を此世から全滅させた時、もう一度、お前達の生きて動く姿を見ることは絶望だ。呪はれた小動物に對して、自分は時に一掬の涙を流すこともある。

けれども自分とても人間の一人である以上いま現に毎夜毎夜害をする所の闖入者に對して同情のゆゑに寛容であることはできない。斯うして自分の鼠に對する戰は續けられた。

九

醤油樽の鼠落しが利かなくなつてから、鼠の荒れ方は一層激しくなつた。彼等は全く食物に無頓着であつた。畏といふものは卑劣なもので、生を全うせん爲に漁る食物を以て、彼等の生命を取るのだ。好ましい方法ではないが、これが一番手取早いので、凡ての捕鼠器は餌を付ける裝置になつてゐる。けれども今の鼠のやうに食物を振向きもせずにいたづらばかりをされるのでは全く手のつけやうがない。遂に自分は子供時代の經驗を利用して餌なしで鼠を捕る方法を用ひることにした。

第一は座敷に飛び込んだ鼠なら絶對に取逃がすことのない方法である。これは部屋の隅にある疊の一枚を四十五度位の角度にめくつて、一尺位な長さの木でその一隅を支へ、木には紐をつけて手許に置くのである。鼠の性質として、追はれた場合大抵隅の方の、低い、暗い所に逃げ込む。疊を上げて置いて追へば、殆んど例外なしにこの下へ入る。その時、紐を引けば、疊はパタリと落ちて鼠を壓殺して了ふ。自分は子供の時にこの方法で一夜に十二匹の鼠を取つた經驗がある。けれども、これが爲めには夜中起きてゐなければならない。さうまでして鼠退治をする勇氣は今の自分には缺乏してゐる。實は一晩だけ試みたが眠いので辛抱がし切れなかつた。そこで今度は第二の方法を選んだ。

鳥黐を十錢程買つて、これを半紙大の厚い洋紙の上に縱横に引伸したものを數枚作つた。それを

鼠の通路に置くのである。鼠がこれに前足をかける、粘り付く、これを取らうとして悶くうちに、後足に黐が付く遂に身體中にくつゝいて、その紙にぐるりと捲かれて仕舞ふ。翌朝見ると鼠は柏餅のやうに紙の皮に包まれて動きが取れずに寢てゐるのである。これも自分が子供の時に成功した方法であつた。しかし今度はどうしたものか、黐にかゝりはかゝつたが、狹い所へ逃げこんで、豫期した柏餅は皮ばかりしか殘らなかつた。そして彼等のいたづらは日に增長した。一時は障子を毎日繕つて見たが、翌朝はチヤンと穴が開いてゐる。一週間ばかり根氣競べの揚句、とう〳〵こつちが負けてしまつた。

一〇

もう斯うなれば仕方が無い、普通の捕鼠器で捕つてやらうと、金物屋から金網の捕鼠器を一つ、板製のもの一ダース買ひ込んで來て、それの各々に鼠の好きさうな色々の食物を取付けた　それを湯殿、臺所、女中部屋、茶の間等の棚といはず、板の間といはず、疊の上から長火鉢の猫板の上にまで並べ立てた。斯うなると毎朝一番先に起きる妻がそれを形付けるのが大變である。殊に危險なのは板の捕鼠器である。誤つて指をはさまれゝば骨位は挫けてしまふ。鼠よりも人間がかゝらぬ用

心をしなければならなかつた。かくまで苦心しても、連夜一匹もかゝらず、いたづらはいよ〳〵激しい。

或日ふと庭を見ると、一匹の鼠が、子供が緣側から投げ捨てたらしい煎餅のかけらを喰つてゐる。そこで今度は庭の方へ捕鼠器をかけて見た。もの〳〵五分と經たないうちに最初の一匹が捕れた。それは朝であつた。夕方までに次々に七匹の鼠が面白いやうに捕れた。この鹽梅では今夜臺所へ出ることはあるまいと安心してゐると、臺所の方の奴は種族が異ふと見えて相變らず出て來る。庭先では毎日二匹や三匹捕れぬ日はない。この時自分は思はず膝を打つて、

「馬鹿々々しい」

と叫ばざるを得なくなつた。鼠の交通は何處からでも自在である。自分は一生懸命になつて近所中の鼠を一手に退治しかゝつてゐたのであつた。

考へて見ると何處の鼠だか分つたものではない、少しでも減らしてやることは、少なくとも近所に對して善い事であらうが、今はそんな『社會奉仕』をやつてゐる場合ではない。寧ろ鼠を自分の家へ入れぬだけの算段すればよいのだ。それから今度は方針を更へて穴といふ穴は悉く塞いで見た。けれども安普請の古い借家などでは、それが到底不可能なことを發見して、今度は家にゐる鼠

を追ひ散らす手段を採るより外はないことになつた。鼠だけに對しては德川幕府の鎖國政策を讃美する自分も、開國の今日では警視廳の態度に學んで、退去命令を發する外はない。實際我々の家庭に取つては鼠は一種の過激派である。

一一

白鼠を飼つて家鼠を追ひ散らす方法は廣く行はれてゐるかどうかは知らぬが、自分が子供の時にやつて見た方法の一つである。それは南京鼠と異つて普通の鼠より大きな、眼玉の赤い白鼠であるこれはよく人に馴れる。それを放して置くと、鼠は逃げて仕舞ふといふことである。それは白鼠の方が家鼠よりも非常に強い爲だと言はれてゐる。所がその白鼠は人には馴れてゐるが、いつの間にか逃げ出して行衞不明になつてしまつた。一月ほどしてから溝の中から顏を出したが、それ切り姿を見せなくなつた。

自分が亞米利加で、ある獨逸人から聞いたことであるが、鼠を退治るにはその內の一匹を先づ生擒にして、それの首に大きな音のする鈴を付けて逃がしてやる。すると他の鼠はこの鈴の音に驚いて四散してしまふ。鈴を付けられた奴は一匹だけ取殘される。そこで最後にその一匹を毒殺するの

だといふことであつた。恰度自分が訪ねて行つた時に、壁の間のやうな所で鈴の音が途切れ〳〵に聞えた。主人はそれを説明して、いま毒がまわつて最後の一匹が死につゝある所だ、そして死んだ場所も鈴の音によつて明かに分ると言つた。

白鼠を飼ふのも面倒だし、首に鈴を付けるのも困る。鼠が猫の首に鈴をつけるといふことに相談一決したが、さて誰もつけに行き手がないといふ昔噺を反對に、人間が鼠の首に鈴を付けることは、可能のことだが、しかし自分にはその勇氣がない。矢張り何か特別に鼠が好きな食物で前後を忘れて喰ひ付くやうなものが有りさうなものと、古い記憶を辿つて見ると、鼠の大好物は蕎麥粉である。これを團子にして燒いた物が一番鼠を惹き付ける。また水甕に六七分の水を入れて、その上に一寸ほどの厚さに蕎麥糠を浮かして置くと、鼠はこの蕎麥殼をせゝくりに來て水甕の水の中へ落ちてしまう。團子も面倒だし、不用の水甕もないので、これも見合せにして、西洋の本を漁つて見た。それによると鼠の大好物は日向葵の種子だといふことだ。大好物のチーズがあつても日向葵の種子があれば見向きもせぬといふことである。そんなことならお易い御用だが既に鼠と戰ふべく氣のくじけた自分は、當分彼等の跳梁にまかせて置く。そのうちに彼等を一時的にもせよ、全滅せずには置くものか、……今晩も亦彼等の御見舞を受けることであらう。（一〇・六・二〇）

長靴と石油ストーヴ

△

今どき草鞋ばきで銀座の町を歩いたら漫畫にはならうが、實際の所、田舍から來る人達でも草鞋ばきは殆んど見當らない。都會と草鞋とは今日既に調和すべからざるものと相場がきまつて了つてゐる。

△

しかし都會は都會でも、日本の帝都であり、東洋第一の大都會である東京の道路は靴や下駄であるくよりも、草鞋ばきで歩くに適してゐることは、誰でも先刻御承知の事である。

△

何時まで俟つても道路は逆に惡くなるばかりの東京では穿物に一工夫なかる可らずと思つて注意してゐると、長靴といふ調法なものが流行出し（？）てゐる。雨の日、雪のあとなぞ長靴黨は大威張りで濶歩するに反して、半靴編上乃至下駄黨は見るも無慘の有樣である。長靴なるかな、長靴なるかな。不景氣で何商賣も上つたりの時節に、長靴だけが泥の飛ぶやうに賣れてゐるといふ事は、

文明國の大都市として正に奇蹟的事實である。

△

それもその筈一體長靴なるものは西洋の草鞋である。文明國のどこの都會に雨が降つたといつて長靴をはいて歩く紳士がをらうぞ。溝さらひや川人足乃至お百姓なら都會で長靴も穿いてゐようが、都會に生活するサラリーメンやビジネスメンまでが長靴を穿いてオフィスに通ふといふのは世界廣しと雖ども東京の外にはあるまい。

△

日本では長靴は軍人と巡査、卽ちサーベルにつき物であつた。それが軍縮の今日サーベルと分離して意外の發展を遂げたことは、一に東京の道路のたまものである。

△

若し世界長靴史を調べるものがあるなら、西洋の都會に於いて殆んど不用な長靴、サーベルに緣の深い長靴、溝浚ひや川人足に必要な西洋草鞋が千九百二十三年の日本の帝都に於いて紳士階級にまで流行して來たといふ事實は世界長靴興亡史上に特筆大書さるべき事柄だといふことを注意して置く。

△

長靴の中に葬られて行く東京市民の足の數は日毎に殖えつゝある（しかも一人二本宛の割合で！）。この調子で道路が惡くなればなるほど長靴の數は殖えて行く。

△

サーベルよ悲觀するな、軍縮は日本に於いて反對に長靴を跋扈させた。溝浚ひよ誇れ、この國に於いて君等の足（頭ではない）は紳士と同じレベルに在る。靴屋よ喜べお前の商賣はます〳〵繁昌する。

△

長靴と歩調を同じうして、イヤそれより圖抜けて賣れ行のよかつたものに石油ストーヴがある。去年の暮れに米國品は飛ぶやうに賣れて、石油會社は宣傳の油のきゝすぎたのに驚いたといふ。

△

中流どころには可成廣く行渡つたと見えて、よるとさはると石油ストーヴの功德を頌すること至れり盡せり。買ひそこなつた人々は今年こそは必ず買はうと今から臍繰をためて置くといふほど心掛けのよい人もあるとか。

△

瓦斯や電氣のストーヴと違つて室から室に持運びが自由である。溫度は可なり出る。こんな重寶なものが生れたのも文明のお蔭であると云はんばかりである。

△

自分もこの石油ストーヴ黨の一人で、去年の暮にお願がひ申すやうにして銀座の或店から一個「拂下げ」て貰つた。成るほど火鉢にくらべると溫度は非常によく昇る。八疊の部屋を六十度に保つのは火鉢では困難だが、石油ストーヴなら油斷をすれば七十五度位には譯なく昇る。その點では慥かに「文明の利器」にちがひない。但しこれは火鉢と比較しての話である

△

十年ほど前米國アイダホ州の田舍を旅行した時、アイダホ、フオールスといふ人口二千に充たぬ小都會に泊つたことがある。この町の近くに大きな瀑布があつて、そこから電力が供給されるといふので、荒州の一寒村ともいふべきこの町は、その時分既に電化されてゐた。一泊一弗位のホテルが電氣のヒーターを使つてゐる。一食五十仙位のレストランが電氣で料理をしてゐる。家庭の暖房でも、臺所の料理でも、洗濯でも、すべてが電氣で動いてゐるのに驚いたことがある。

△

その時分のことである。米國の石油ストーヴ會社は數百枚の問合狀を各方面に發して石油ストーヴ利用の方法について回答を求めたその中にたつた一つ斯ういふのがあつた。

「今時分石油ストーヴでもござんすまい。瓦斯や電氣の時代ですからね」

この皮肉な一婦人の回答が凡てのうちの壓卷であつたといふ。それは十年も昔の話である。

△

今日米國あたりで石油ストーヴを使ふところを考へて見る。田舍では必要だらう位に思ふのは大なる間違ひだ。材木のありあまる地方の百姓家では鐵道の枕木を荒削りにしたやうな偉大な薪をおしげもなく塗込暖爐に投げ込んで暖を取る。木材に缺乏してゐる地方には石炭がふんだんにある。都會には電氣もあり瓦斯もあり、おまけに蒸氣をパイプで供給する會社まである。何を苦しんで世界的に缺乏を告げてゐる石油を燃しませうぞ。

米國の都會にも、田舍にも、使ひ途のない石油ストーヴは勢ひその捌け口を國外の未開國に求めねばならない。

圖らずもその未開國の選に當つたのが、東洋第一の日本であつた、まさかと思つて送つた見本は

忽ちに賣切れる。後からの見込が多過ぎたので殘つてはならぬと精々廣告したら、足りなくて困るといふ意外の現象を呈した。

石油ストーヴも東洋第一の文明國の帝都に大威張りでゐられやうとは夢にも思はなかつたらう。

△

東京市の人達が石油ストーヴで「文明の恩惠」に潤つてゐるとき、田舍から來た爺が、「こんなものは二十年も前に流行つた丸心のランプぢやないか」といつた。

如何さま丸心のランプである。あの舊式のポンプで石油を壺に入れたり蕊を切つたりする時、自分は何時でも子供時代の辛い經驗の一つのランプ掃除を思ひ出す。

△

世界は既に大方電化してゐる。石油の埋藏量も先づ見えてゐる。列國の石油爭奪戰が猛烈になつて北樺太で米國に鼻毛を拔かれてゐながら、米國の石油を使つて「文明の恩惠」も驚いたものだ。

△

豐富な水力にかこまれながら、我々は電燈にも事缺いてゐる。先願權とやらを無暗に尊重する餘弊から、初めから事業を起す積りでなく「權利」を高く賣らんがための我利〳〵連中の爲に、國家

の電力は封鎖されてゐる。勞農ロシアでは森林に圍まれながら薪に不自由をしてゐるといふが、天與のホワイト・ダイヤに圍まれながら、電燈が消えたり、電車が停つたりする我日本の狀態では赤露を嗤ふことも出來ぬではないか。

△

石油ストーヴを理想的のものと思つて使つてゐる人ばかりではあるまい。瓦斯を引かうとしても電熱を取らうとしても、恐ろしい引込料を取られる。石炭や薪のストーヴは日本家屋に適しない。時代錯誤と知りながら已むを得ず、石油ストーヴを便利扱ひしなければならぬ我々の生活のみじめさを何と見る。

△

日本の文明が西洋と比べて遲れてゐるといふと、怒る人があるが、それが十年や二十年でないことは西洋草鞋の長靴が流行したり、丸心ランプの石油ストーヴが歡迎される事でも知れる。

△

とは云ふものゝ、普通選擧さへ「調査中」の日本だ。長靴や石油ストーヴは寧ろ分に過ぎたるものか。（一二・二・二五）

雨戸と縁側

一

栃木縣の或る村の國勢調査員が、例の豫習の際に、

戸數千五百五十、人口百十

といふ統計を作つた。戸數が人口よりも遙かに多いといふのは不思議だと、よく〳〵調べて見たら、この調査員君、村中の戸の數を調べ上げたものだと知れた――といふ珍談がある。これによると、人口に對する戸の數は一人當り十四枚强についてゐる。

二

國勢院の發表によると、日本內地の總人口は約五千六百萬、一世帶五人の平均とある。この世帶數を直ちに戸數と見做すが當を得てゐるかどうかは、一概にいふことが出來ないけれども、貧乏人は一棟の家に幾世帶がある代りに、金持は一世帶で何軒かの家を持つてゐるから、これを戸數と見做すことは不當でないやうである。國勢院でも大體さう見てゐるやうに思はれる。假りに一戸につ

き雨戸が五枚平均あるとすれば、恰度人口と同數の五千六百萬枚といふ雨戸が日本中にある勘定になるが、雨戸の統計といふやうなものは未だ曾て聞いたことが無い。そこで過の功名として、前記栃木縣の統計を標準に取つて見る——兎も角もこれが日本に於ける「戸數」調査の嚆矢である——一人當り十四枚の雨戸の割合で行くと、日本中に七億八千四百萬枚といふ雨戸があることになる。現在最下等のもので一枚三圓五十錢はするといふから、この總額は二十七億四千四百萬圓。これだけ金目な財產が、雨戸だけで日本にあると思へば、甚だ以て心强いやうなもの丶、これが白金か黃金か、乃至は鐵、石炭、石油の類ならば、イザといふ場合、大した役目をするが、雨戸では取外して持出しもならず、持出して見た所で、船も造れず、汽車も動かず、鐵砲の彈丸除には尙更ならぬ。擔架の代用にはなるが、これだけの擔架を動かすには負傷者ともに現在人口の四十二倍が入用になる。

三

次には日本住宅特有の椽側である。これも家屋の割合に隨分場所をふさげてゐるもので、手取早く一人當りを一坪と見て、五千六百萬坪といふ廣大な面積が日本全國中で椽側に取られてゐる譯になるのである。

四

だが自分がいま問題にしやうといふのは、雨戸の枚數や、椽側の面積そのものではない。これによつて起る處の日本人の經濟生活が、如何に重荷を國民の肩上に負はせてゐるかといふ事である。毎日五千六百萬坪の緣側に雜巾掛をする時間を一坪平均五分間と見て、これを一人でやることにすれば四百萬時間を要し、一日八時間勞働とすれば五十四萬日、約一千五百年はかゝる。これを一日一圓の日當として、日に五十四萬圓、年額約二億圓といふ勞働が雜巾掛の爲に消えてゐる。

五

七億八千萬枚の雨戸を、朝夕開閉すると十五億六千萬回になる。一枚平均一分を要するとして二千六百萬時間、これを同じく一人の手でやるとすれば百八萬餘日、約三千年、一日八時間勞働にして九千年に亘る大事業となる。これを同じく一日一圓の勞銀に積れば、一日三百二十八萬五千圓、年額約十二億といふ巨額が、單に雨戸の開閉に費されて了ふ。

六

二十七億の金を雨戸に固定するはよいとしても、これが爲に年々十二億の開閉費を要し、五千六百萬坪の緣側に對して、年々二億の雜巾費を要することは、貧乏な日本としては大に考へなければならぬ問題ではあるまいか。

七

西洋住宅にしても全部これ等の費用が節約される譯でもなく、また西洋住宅が必ずしも理想的であるとは謂へないが、住宅問題の八釜しい今日、これだけの無駄な仕事があるといふことを數字上でお目に掛けて住宅改良の一つの御參考に供したいのである。（一〇・六・五）

氷山の頂

一

『政治の目的は、善を爲すに易くして、惡を爲すに難い社會を造るに在る』とグラッドストーンは言つた。虞翁は流石に偉大な政治家であつた。今日の英國の政治が虞翁の理想を距ること遠いものがあるにしても、これだけ簡明に政治の目的を喝破して呉れた政治家が、曾てあつたといふことだけでも、英國は實に羨むべき國だと想ふ。

二

所がこの反對に、「惡を爲すに易くして、善を爲すに難い」社會を立派(?)に造り上げた政治家が、東洋の英國を以て任ずる國にある。その國の新聞を見ると、如何に善を爲す者の尠くして、惡を爲す者の驚くべく多いといふ事が知れる。名ある官吏、政治家、實業家、教育家といつた人々が繩つきで閻魔の廳に引出されてゐる。それが永いこと毎日々々新聞の記事となつて現はれて來る。これでも東洋の君子國といふのださうだ。

三

けれども、それはたゞ海の表面に現はれた氷山の頂のやうなものである。見えるのはホンの一部分で、隱れた所に、より大きな恐るべき根本的罪惡が、磐石のやうな根を据ゑて伏在してゐるのだ。閻魔樣のお調べを受ける手合は、寧ろ憫むべき犧牲かも知れない。呑舟の魚とやらは、いつも網を破つて遁れ、細鱗のみが數多く拉致される。實をいふと惡い事は皆がしてゐるのだ。たゞこの網に引かゝつた奴が『不運』であり、或は『間抜』であるに過ぎないのだ。

四

世道人心の廢頽を慨き、國民思想の惡化を憂へる事を表看板とする、パリサイ式の義人はゐる。けれども、之等の事件に對して心から本統に大きな顏の出來る者が果して幾人あるか。若し潔白であつたならば、その人は當時『不幸にして』さうした誘惑の地位に置かれなかつた人で、今では『僥倖にも』さうした事件に關係が無いといふに過ぎない。かうした『偶然の潔白』が何の誇にならう。若し自分がその時、その地位に在り、その機會に臨んでゐたら……と考へる時『爾曹のうち罪なき

者先づ石をもて彼女を擊つべし』といつた基督の言葉を顧みて、果してその『罪人』を審き得る力があるだらうか。

五

今の社會組織、現下の政界の事情の下に、多數の人々は生活の安定を得んとして苦んでゐる。さうしてその最も『賢明』な途は、資本階級の仲間入をして、現制度の下にあらゆる特權と保護と恩惠とを受けることである。資本階級は實に生活の安全地帶である。この安全地帶に一日も早く飛び込みたいばかりに、現代の「利口者」はアセリにアセツてゐる。併し如何にアセツても貧乏な政治家であり、薄給の官吏であり、小さな實業家であつては、到底この圈內に飛び込める見込はない。見込はないといつて引込んでゐれば、彼等は見すゝ〳〵社會の落伍者としてその生活を脅かされる。彼等が互に相結托して不正の利を漁るのは、無論道念の不足にもよるが、生活の脅威を恐れてこの『安全地帶』に避難しようといふ努力の現はれとも見られる。單に貧乏人とのみ限らない、金が有り餘る資本家までが、間接にこの脅威を受けて、その安全地帶をいやが上に安全ならしめようと努力する。弱肉强食の自然界の掟がそのまゝ、この國の人間社會に行はれてゐると見れば、兎を捕つて

喰ふ獅子にも萬更同情せぬ譯にも行かなくなる。

六

この間に在つて資本家制度の不合理を指摘する社會主義や、閥族政治の弊を叫ぶ在野政治家は、その主義主張の爲に迫害をも忍んで民衆の幸福を思つて吳れる。勿論民衆を踏臺として資本家の仲間入をする野心家もあることはあるが、それは例外として、自己の信條によつて動く尊い心の持主を歷代の政府は壓迫してゐる。さうして民衆を利に悟らせて、矢張り同じ方向——生活の安全地帶へ追ひ込まうとしてゐる。不正不義がその間に起らないのは寧ろ不思議といつてもよい。

七

檢擧によつてこの國民の道念を喚び醒ますことは、固より絶望である。それはたゞ氷山の頂を斧を以て打ち壞すに等しい。水面下の大氷塊を根本的に溶解させる暖流のない限り、徒らに國民をして法網をくゞる事を、より巧にさせるに過ぎない。この儘で進むならば疑獄事件は此國の周期的年中行事の一として永久に熄むことはあるまい。（一〇・五・二〇）

棄て得ざる惱み

「勿體ない」といふ感念が物を腐らせる。

臺所に於ける料理の材料やら、その喰餘りや乃至は菓子の殘物に至るまで、日本の主婦によつて「勿體」ながられた揚句の果に、腐るまでは棄てることが出來ない。

新聞の投書などを扱つて見ても、日々一篇しか載らない所へ毎日數倍乃至數十倍の原稿が來る。その日〳〵に葬つて了へば何でもないが、棄てるには勿體ないものが多いのでツイ仕舞つて置く、後から後から新しい問題が起て新しい投書が同じ割合で來る。取つて置きが、日の目を見ずに腐つて行く、これも腐らなければあきらめが付かない。

自分の家には先祖代々傳つた書類が多い。その爲に移轉も容易に出來ず、仕舞つて置いても場所ふさぎになるばかり、言はゞ荷厄介ではあるがさてこれを紙屑にするには餘りに勿體ない。いつか一度は整理しようと思つてゐるうちに五年十年と經つて、或る部分は鼠が巣を作り、蟲が喰つて了ふ。自分の手では紙屑にも爲兼ねるが、鼠なり、蟲なりが紙屑を拵へて吳れゝば、忌々しいながら

も棄てる氣になる。

それでも食物のやうな金錢で買へるものはどうでもなるが、金で買へない書類などになると愛著の心は一層強い。それが歴史のある事物から長い間の風俗なり習慣なりになると更に棄てがたい思ひがする。勿體ないといふよりは、傳統や舊趣味に對する執着といふ方になつて來る。

二

舊文明から新文明へ、舊時代から新時代へ、舊思想から新思想へ、舊道德から新道德への過渡期に立つて、日本は今あらゆる意味から「棄て得ざる惱み」に惱まされてゐる。

丁髷も切るに惜しい時代もあつた。時代遲れの銀座の柳でも一時の別れが惜まれた。何物にも歴史はある。小なる歴史を尊重し、價値なき傳統に執着するならば、吾々が毎日使ふ一錢銅貨にも棄て難い愛着が起る。保存すべきものと保存すべからざるものとの別は「時」を隔てゝこれを見れば自ら明らかであつても、現代に在つて棄つべきものと棄つべからざるものとを識別するは一般人には困難である。歴史の尊重は結構である。けれども歴史の精神の尊重は一層好い。現代の日本人は餘りに歴史上の個々の事實に卽し過ぎて、その大潮流の底を流れる精神を忘れた傾きがある。

三

文明の進歩を妨げるものは明治初期の老人が丁髷に別れを惜んだ心である。明治天皇の御英斷は先づ親しく御斷髮あらせられて、その範を人民に垂れさせ給ふたことである。假りに大正の今日日本人が依然丁髷を戴いてゐるとする。それに對して斷髮の可否が問題になつたとしたならば、政友會の如きは普選案を一蹴した意氣込で必ず議會で反對するに違ひない。明治初期と大正の今日と比較して、如何に新思想が前者に多くて後者に尠ないかを見ると、時代は確かに逆轉したやうに思はれる。

洋服を着ながら和服との別れも辛らく、靴を穿きながら下駄との緣も切りたくない。斯うした二重思想が二重生活を生み、思想上にも生活上にも不徹底極まることをしてゐる。自ら棄つべきを棄てる力がなくて、たゞ時の力にたよりて他動的に腐つてから棄てる方針を採つてゐる日本の現狀は心細いといふも愚かである。日本よ先づその「棄て得ざる惱み」を棄てよ。（一〇・七・五）

國旗調査

皇太子殿下の御歸朝に際し青年團が大に活動するといふ。その活動なるものを聽いて見ると、國旗を出さない家があつてはならぬから、今から各戸毎に國旗の有無を取調べて、無いものにはこれを備へさせようといふのださうだ。如何さま國旗屋の喜びさうな名案であるが、國旗一つ買ふことの出來ない貧乏人のあることも忘れてはならないと同時に、さうした强制的な勸誘をしてまでも旗を買はせることが、果して殿下の思召に叶ふや否やを考へて見なければならない。

けれども凡そ國旗を購ひ得る餘裕のある者で、國旗を持たぬものがあらうとは信ずることは出來ない。成るほど祭日に國旗を出さぬ者もあるかも知れない。しかしそれは別に大した意味のあることではなく、たゞ忘れてゐるといふ位に過ぎはしまいか。祭日を忘れるなぞは怪しからぬ非國民だといふ非難もさることながら、今の日本の祭日に果して本統の祭日氣分が出てゐるか否かを考へて見るがいゝ。成るほど官廳學校、銀行會社は休みであるが、それはたゞ、それ等の勤め人がその日を休むといふだけであつて、休めない多くの國民が、汗になつて働いてゐることも考へて見なければならない。凡そ國祭日といふからには、國民が擧つて休業し、擧つてその日を祝するか、記念す

るか、兎も角も國民が衷心からその日を歡び迎へるのでなくては意味をなさない。然るにこれが行はれぬといふことは何處に原因があるか、これを以て直ちに國民の皇室又は國家に對する觀念が薄らいだと見るは淺見の甚だしきものだ。

「お宅には國旗がおありでせうか」そんな質問をされたら、普通の日本人なら怒るにきまつてゐる一種の侮辱ではないか。そんな質問をされるよりは、もつと突込んで「あなたは大和魂がおありですか」と聽かれた方がまだ幾らか氣持がいゝ。更に進で「あなたは日本人ですか」と聽いて歩るく方が一層徹底してゐる。

國旗の掲否で愛國心の有無を測らうとするやうな淺薄な頭の持主は、形式的に戸毎に國旗でも並んだら、子供のやうに手をうつて喜ぶだらうが形式の統一が民心の統一の證左と思ふは大間違である。斯うしたことは國民各自の自發心に待つべきで、他の干渉すべき性質のものではない。

國旗調査なんといふ馬鹿げた時間があるのなら、その時間に、もう少し海外の思潮や、世界の大勢を研究して欲しい。皇太子殿下の御歸朝に際して、國旗が出揃はないなどいふ心配をするのが抑々目先の見えぬ話しだ。國民の赤誠が溢れゝば、戸毎に一本の國旗どころではない。國民は手に手に國旗を持つてお出迎する位は判り切つた話しだ。たゞ宮内省が國民の赤誠の發露を如何にして喰

止めんかと苦心してゐるやうな有樣が、聊か心細い。だが心配し給ふな、皇太子殿下は宮内省の皇太子殿下ではなく、畏くも吾等の皇太子殿下で入らせられるのだ。これを衷心から御歡迎申上げなくて何とする。國旗なぞは問題ではない。そんなことは國旗屋にまかせて置け。（一〇・八・六〇）

鼠の避寒